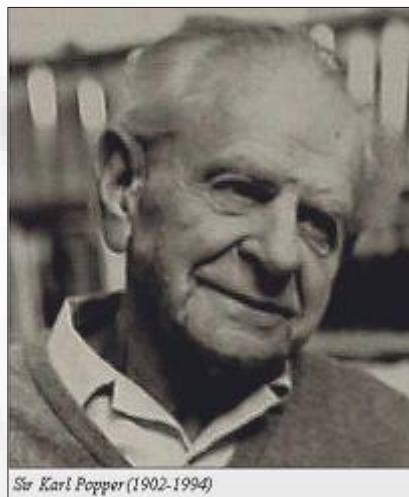


批判的合理主義研究

Studies in Critical Rationalism

2011

Vol. 3, No. 1



Sir Karl Popper (1902-1994)

Studies in Critical Rationalism

2011

Vol. 3, No. 1

日本ポパー哲学研究会事務局機関紙編集部

(2011 年 6 月号)

CONTENTS

<自由論題>

ロックの蓋然性論における「慈しみ合い」とポパーの「寛容」	瀧田 寧	1
------------------------------	------	---

<基調講演>

「現代記号論の発展とその方法—言語中心主義からサイバー・セミオティクスへ」	江川 晃	2
---------------------------------------	------	---

<第 22 回年次研究大会シンポジウム発表要旨>

客観的解釈の可能性—批判的合理主義における理解の方法—	榊原研互	6
「記号論の個別科学への応用と課題—消費の解読のために—」	松尾洋治	12
「パースの知識進化の記号論とその現代的展開について」	江川 晃	14

<連載>

対話によるポパー入門	蔭山泰之	19
------------	------	----

<翻訳>

『批判的合理主義：再定式と擁護』、第 2 章(1)、「帰納の問題に対するポパーの解決」	D・ミラー著 小河原誠訳	29
---	--------------	----

<新刊紹介>

ポパーがコンサーヴァティブになった次第	小河原 誠	44
---------------------	-------	----

<連絡、報告、Information など>

アンケート結果についての報告		49
電子ファイルの送付について		50

<<自由論題>>

ロックの蓋然性論における「慈しみ合い」とポパーの「寛容」

瀧田 寧

本報告では、ポパーの『よりよき世界を求めて』（1984 年）に収録されている論文「寛容と知的責任」におけるポパーの「寛容」についての考え方と、17 世紀イギリスの哲学者ジョン・ロックが、特に蓋然性をめぐる論述において主張する「慈しみ合い (mutual charity)」という探究者のあり方とを手がかりに、両者の真理探究者としての人間観を比較することを通じて、従来注目されてこなかったポパーとロックの類似点に光を当ててみたい。

ポパーの「寛容と知的責任」には、「クセノファネスとヴォルテールからとられた」という副題が付されている。そして論文中では、本論のタイトルが「啓蒙主義の父ヴォルテール」の寛容擁護の議論を示唆していることを述べた上で、ヴォルテールの『哲学辞典』（1764 年）における「寛容」という項目の冒頭部分、すなわちヴォルテールが「寛容とは何か」について論じた部分を、ポパー自身の自由訳によって紹介している。

ところで思想史的には、啓蒙主義者ヴォルテールが取り上げられる場合、彼に影響を与えたイギリスの哲学者の一人として、ロックの名前が挙げられることが多い。寛容論というテーマについても、ロックには 1689 年に刊行した宗教的寛容を論じた著作がある（『寛容についての書簡』）。さらに、ロックはその翌年『人間知性論』を刊行し、とりわけその第 4 巻後半では、確実な知識とは峻別された蓋然性（意見や信念）の諸問題を論じる中で、探究者同士の「慈しみ合い」や「抑止 (forbearance)」の意義を強調している（第 4 巻第 16 章第 4 節）。ロックの認識論と言え、哲学史上では、心を「白紙」と想定することから始める経験論の側面がしばしば強調され、実際『人間知性論』が注

目されるのもその表現が登場する第 2 巻であることが多いが、ロック自身が本書の執筆当初から意図していたことを考えると、むしろ本書は、最終巻の第 4 巻に眼目があると言える。そこでは、確実な知識と蓋然的な信念や意見との峻別、確実な知識を得られる領域の狭さ、そして、蓋然性しか得られない領域—生活の大部分を占める—における探究者の誤りやすさ、といった問題が論じられるのだが、もともと医者としても政治家の秘書としても活動していたロックにとって、こうした蓋然的な意見や信念しか得られない領域における論者同士の意見対立こそ、差し迫った課題であったのである。実際、ロックは本書の序論でも、確実な知識の持てないところ、すなわち蓋然性を探究するしかない領域では、人間がどんな尺度で同意を規制し、信条を緩和するべきであるかを検討することは行う価値があると述べ、このテーマへの意欲を示している。

一方、ポパーがヴォルテールを引用した箇所でも力説していたのも、誤りに陥りやすい人間が互いに許し合うことの重要性である。またポパーは本論文の中で、「懷疑主義者のクセノファネス、ソクラテス、エラスムス、モンテーニュ、ロック、ヴォルテールそしてレッシング」といった「懷疑主義の伝統に属する者たち」と彼自身とが共有するものは「人間の無知を強調すること」であると述べ、さらにそこから引き出されるものとして「寛容」を挙げている。したがってポパー自身も、およそこうした面ではロックと共有するものがあることを認めている、と言えよう。しかしながら、ポパーがロックの主張に直接踏み込んでいるわけではないので、両者が具体的にどのような点を共有しているのかが明らかではない。

そこで本報告では、ロックが『人間知性論』で蓋然性を論じた部分、特にそこでの探究者のあり方をめぐる論述と、ポパーの「寛容と知的責任」論文とを比較しながら、両者の真理探究者としての人間観を検討

していくことにより、ポパーが自らは具体的に語っていない 17 世紀イギリスの哲学者との類似点を明らかにしていきたい。またこの比較を、従来あまり注目され

てこなかったロックの蓋然性論の意義を現代において再考する契機にもしていきたい。

<<基調講演>>

「現代記号論の発展とその方法－言語中心主義からサイバー・セミオティクスへ」

江川 晃（日本大学）

1 semiology と semiotics

記号論(semiotics, semiology)の語源は、ギリシア語の $\sigma\eta\mu\epsilon\iota\omicron\nu$, semeion や $\sigma\eta\mu\alpha$, sema に関連しており、semeio-がラテン語化され semio-となった。周知のとおり、semiology と semiotics は、記号論の二つの伝統に由来する。一般的に、ソシュールからイエルムスレウやバルトという言語学の伝統では、semeion から来る semiology と定義され、パースやモリスの伝統においては、記号の理論は semeiotike から semiotics と呼ばれた。しかし、現在では、semiotics は semiology と同義語として、また、より一般的な語として広く認められており、さらに、semiotics は一つの部門として semiology を包含するものとみなされている。

2 ソシュールの記号論

ソシュール(Ferdinand de Saussure, 1857 - 1913)の記号論の特徴は、言語を中心にした点にある。ソシュールは、19 世紀の言語の系統や歴史的変化の研究という伝統から抜け出て、言語を共事態において記述し、その言語システムの研究を通じて、言語学を打ち立てた。彼にとって、言語学の対象は、記号のシステムとしての言語であるゆえ、記号の理論に関心があった。

「私たちはそれを記号論(semiology)と呼ぶだろう(これは「記号」意味するギリシア語の semion から来ている)。それは、記号とはどのようなものなのか、ど

のような法則が記号をつかさどっているのかを私たちに教えてくれるであろう」

ソシュールによって想定された記号論は、「いまだ存在していない」から[どのような形を採るかわからない]のであるが、「存在する権利」があるし、「その位置はあらかじめ定められている」と主張された。それは社会生活の中心にある記号の生命を研究し、「社会心理学の一部門」となると考えられた。つまり、記号論(semiology)が発見する法則は、人間的現象全体、自然ではなく文化を支配する法則ということになる。

ソシュールの記号論は、人類学や社会学や文芸批判により多彩な発展を遂げ、それらは、社会の共通の構造こそ記号のメカニズムであるとみなす構造主義の様相を呈した。彼らの記号論は、社会制度、文学、映画、建築、広告等の文化的人工物に焦点を合わせた記号の科学を展開し、言語をモデルとして把握する文化記号論という特色を持つ。その意味で、ブーイサックが指摘するように、それらは「言語中心主義」の記号論として考えられる。

しかし、ソシュールは、記号論の必要性を見抜いたが、記号論を人間の信仰や知識や経験全体に付属する学問であると制限した。さらに、記号表現 signifiant と記号内容 signifie という二項的基本図式には、第三次性が欠けており、実は、記号(表現)はこの第三次性(解釈項)により記号内容(対象)と結び付けられ、そこから他の記号へと変形されるのである(記号過程)。

3 ロックの記号論

ロック(John Locke, 1632 - 1704)によると、第一義

的に記号とみなされたものは、伝達手段としての「言語」であった。ロックは『人間知性論』で、この言語記号について述べている。

「第3に、第3の部門はセーメイオーティケー(σημειωτική)、すなわち記号の理論(doctrine of signs)と呼べるだろう。記号の最も通常なものはことばであるから、ロギケー(λογική)つまり論理学(logic)と名づけるのも十分妥当である。その課題は、精神が自らに 対し事物を理解させるべく、また他者に自らの知を伝えるべく、精神が用いる記号の性質を研究するところにある」

ロックは、哲学(学問)を(1)自然学(自然哲学)、(2)実践学(倫理学)、(3)記号論(論理学)に分類し、「記号論」と「論理学」を同義語として用いている。この場合、「論理学」は通常の意味よりもかなり広義に把握されるべきであり、後にパースはこのロックの用語法を踏襲して、semiotic とした。

ロックは、「言語は一般的記号として、感覚可能な観念に由来するものである」として、言語の基本的な意味を感覚的意味に還元することにより、観念の相互伝達、思想の相互交流の道具である言語は、「コミュニケーションのために必要な感覚可能な記号」である、と考えた。

4 パースの記号論

パース(Charles Sanders Peirce, 1839 - 1914)は、ソシュールの伝統とは異なり、言語ではなく記号過程のなかにより広範な、基本的な過程を見出した。パースは 1867 年の「新カテゴリー表」から 1908 年の晩年に至るまで、幾度となく記号の定義を試みてきた。

「私は記号を次のようなものとして定義する。一方ではある対象によって規定れ、他方では人の心にある、ある観念を規定し、そのため、私が記号の解釈項と名付けるこの後の方の規定作用がその対象によって間接的に規定されているようなもの。」(8.343)

ディリーに従えば、より広義の記号概念は以下のよう to 換言することができる。

「記号とはある B によって(記号として)決定された

A であり、C を決定するときに、その C は B によって決定されるのである。」(A:記号、B:対象、C:解釈項)

ここに、最も原初的で抽象的な記号の三角形の形態をみることができる。C は表象=再現として A と B の双方に関して実質的現実として能動的なのである。

この場合、解釈項が記号過程にとって基本的であり、解釈項はさらに記号として解釈され、「無限の記号過程」の連鎖を引き起こす。実在や習慣は、記号過程の連鎖の動的な進化により辿りつかれる(進化的実在論)。また、パース自身も気づいていたが、解釈項は必ずしも人間の心理的な状態である必要はない。

パースの記号論は、人間の記号過程を自然界の記号過程の一部と捉え(汎記号論)、人間の経験のあり方を根本的に反省させるものである。その後、ユクスキュルの環世界論やローレンツの動物行動学に関連させて、パースの記号論を継承したシビオクは、意味作用や記号過程から生命に迫る「生命記号論」を構想した。

ソシュールは記号論の基本的概念を、言語をもとに確立してきたが、その道程には構造主義という支配的な思想が繁殖しており、より広い記号論の領域が開拓されることを困難にしていた。ところが、その拡張作業は、記号過程という言葉で表わされる自然と文化の接触領域からなる過程をあらゆる点から説明されることによって遂行されることになる。

5 ユクスキュルとシビオクの記号論

ユクスキュル(Jakob Johann Baron von Uexküll, 1864 - 1944)は、環世界論のパオニアであったが、記号論の限界を乗り越えようとした。ユクスキュルにしたがうと、さまざまな生物体は、この世界において無限にある多様性の中から、その種固有の組織(器官)に適したものを選択することにより、自らの「環世界」(Umwelt)を形成する。つまり、解剖学的に大きく異なる動物は同一の世界に住んでいるのではない。したがって、人間と動物が共有する対象の世界は存在しないのである。言い換えると、生物種は、それぞれに分節された世界に生きており、それぞれに意味をも

つ世界が環世界に他ならない。

シビオク(Thomas A.Sebeok,1920～2001)の功績は、モリスの行動学的記号論の影響のもとに、記号の科学として「動物記号論」(zoosemiotics)を創設したことにある。動物記号論は、人間を含めた動物の同種間コミュニケーション、そしてあらゆる動物の異種間コミュニケーションをもその対象とする。シビオクは、動物記号論を、記号の科学である記号論と動物行動学との交差領域に位置付ける。動物記号論では、動物のコミュニケーションは、とくに、送信者(sender)、メッセージ(message)、コード(code)、受信者(receiver)、コンテキスト(context)、経路(channel)等において分析される。

動物(人間)の使う記号には、単純な生理的信号から複雑な象徴的なものまでさまざまな種類がある。シビオクによれば、記号論は、そうした記号を生産し解釈するという動物(人間)の生得的能力を明らかにするためにある。動物記号論が提示する記号過程の主な構成要素は、イメージ、アイコン(似像)、ことば等の「記号」、具体的あるいは抽象的に指示される「対象」、そして記号と対象が生物体において作用して生じる「意味」である。

この記号過程の三要因、つまり、記号・対象・生物体における意味には、パース(記号・対象・解釈項)やモリス(記号・対象・解釈者・解釈傾向)の記号過程に通じる基本的構想が継承されている。シビオクは、記号過程は心に生得的にある本来的能力であり、それ故、「生命は記号過程である」と主張する。このような彼の記号論は、行動科学、認知科学、社会科学等のうちで科学的研究としてより広く受け入れられるようになった。

シビオクは、記号を基本的に6つに分類する。つまり、信号(signal)、兆候(symptom)、類似記号(icon)、指標記号(index)、象徴(symbol)、名前(name)を取り挙げ、生物の記号過程をこれらの記号分類により特徴づける。この場合、象徴的性質をもった記号過程でさえ人間という種のみ固有なものではない。言語的記号過程は人間に固有のものであり、身体—精神—文化という変形である記号過程の究極の到達点とみ

なしている。しかし、人類のコミュニケーションは、むしろ、言語と非言語の両過程として全体的に考究される必要がある。

ユクスキュルとシビオクは、生物体が共通の客観的世界としての対象を知覚・共有できないこと、つまり、生物体の行なう知覚はそれぞれの種の有する「設計図」(Bauplan)に従っていることを発見した。この「設計図」とは、外的対象を生物学的にプログラムされた仕方では解釈を可能にする精神的モデルシステムである。シビオクにとって、このシステムは生物体にインストールされており、それは外的世界を、特定の種の「設計図」により精神的世界の表現へと変換を可能にするのである。

生物体は、自らの生存にとって有意味な「環境世界」に生きている。シビオクにとって、記号(言語)とは、人間が自らの生存との関係において「世界をモデル化」するために生じてきたものである。したがって、心や精神とは、生物体(人間)が自らの環境を認識するというモデル形成のための記号体系である。動物は、生きていくための信号や記号の使用能力をいかにして獲得したのか、また人間と動物の記号過程はいかなる点が似ているのかあるいは違うのか、という問題がシビオクの生物学的アプローチの中にはある。

こうしてシビオクは、かつて古代ギリシャ医学において徴候学としてはじまった記号論を再び生命と関わる生命科学の分野に位置付けた。言い換えるならば、近代に入って、記号論は哲学や言語学そして解釈学の分野にあまりにも囚われすぎていたが、その領域から記号論を解放し、広い意味での生命科学の分野に移植したのである。

6 ホフマイヤーの生命記号論

デンマークの分子生物学者ホフマイヤー(Jesper Hoffmeyer, 1942-)は、パースの記号過程(記号・対象・解釈項)に着目し、独自の生命記号論を展開する。例えば、医者が赤い発疹の出た子供をはしかであると診断したとしよう。この場合、記号過程とは、「記号」そのものを表す物体(赤い発疹)が、「解釈項」(誰か: 医者)に対して、「対象」(何か: はしか)を表すことである。ホフマイヤーによると、生物の生殖や進化にもこ

のような記号過程が存在するという。個体発生は親からの記号化された情報を(料理のレシピのように)含む DNA 配列(記号)から、「血と肉」を持つ生命体(対象)が作られる。では、誰が、この DNA(記号)を解読するのか。もし、DNA が受精卵細胞の中になければ、まったく何もおきないだろう。受精卵細胞だけがこの記号を読み取り、その情報に従って新たな生命を作り上げること(対象)ができる。つまり、この場合、記号(DNA)の解釈項とは受精卵細胞なのである。生物は記号論的な意味で生き延びる。つまり、記号が次世代に引き継がれることにより系統を存続させる。遺伝とはまさに記号論的な存続である。

生物は自己を記述する DNA の塩基配列を複製するが、時に複製が誤ることがある。その誤解の連鎖の結果が生物の進化となる。生命の営みや進化は創造的で予想不可能である。特に、進化は「創発」という語で説明される。創発とは、個々の部分からは想像できない性質を持った実体の創造を意味する。しかし、この創発は数学的モデルでうまく説明することは不可能である。なぜなら、生命の営みを数学的な等式の中に押し込もうとすると、そこから創造性が排除されてしまうからである。こうして、ホフマイヤーは、創発的な生命の営み、進化を探究する方法として、パースの記号論的モデルを積極的に取り入れるのである。

パースは機械論的哲学から帰結する「必然論」(決定論)を批判し、「偶然論」(非決定論)の立場に立っている。「必然論」は、「宇宙に存在する単一の事実はことごとくみな法則によって正確に規定されている」とするものである。それに対し「偶然論」は、自然法則の成立を説明するためには、非決定論的要素、自発的行為や純粋に偶然の要素が自然界に持ち込まれる必要がある、とする考え方である。ホフマイヤーがパースに共感するのは、まさにこの点においてである。

「この世界では、支配できないところにこそ自分の意志が可能となり、それゆえに、根本的に新しい何か、すなわち、本質的に予想できない何かを生み出すことができる、と考えられる。私はパースと同じく、このように考えられる哲学の

ほうが好きである。」

そこで、ホフマイヤーは、パースの「習慣」および「習慣変更」の概念に着目して、生物の進化を「宿命と自由」という観点から説明している。「パースの形而上学の要点は、自然には『習慣化する』傾向があるということに尽きる」とホフマイヤーは断言する。パースの哲学においては、自然は持続的な発展過程の中では、「習慣化する」傾向を持つが、反対の極においては「無政府状態」になることがある。それは、新たな「発明」によりある習慣の支配から独立を繰り返そうとする自然の傾向である。これら対立する二つの自然の傾向を、ホフマイヤーは「宿命と自由」と呼ぶ。

ある特定のレベルにおいて「宿命」(自由の欠如)に支配されると、特定の法則や習慣が固く確立され、そのレベルでの宇宙は予測可能となる。この能力こそがすべての生命体の特徴である。細胞の中に物質とエネルギーの独特な関係が出来あがると、やがて生物は細胞分裂によりその複雑な内部構造が繰り返し固定化されていく。この反復は習慣化されて、そこに予測可能性、法則的秩序が「宿命」として生じることになる。

ところが、科学的組成の定まった細胞は、記号論的な「自由」を生じさせる。自然はその習慣の支配から独立し、変更を繰り返そうとする傾向をもつ。生物は自分自身を DNA 分子の塩基配列に埋め込まれた記号によって複製する。ところが、この複製には誤りが生じることもある。この絶え間ない誤りと誤読が連鎖的に働いて、やがてその帰結が「生物進化」となっていく。つまり、生物学的レベルの予測不可能性、それが「自由」であるかのように生まれることで、そこに「宿命」の克服としての「習慣変更」(突然変異)が成立したのである。

7 ブリアのサイバー・セミオティクス

ホフマイヤーは、生命や進化を記号と情報の観点から把握することにより生命記号論を発展させているが、ブリア(Søren Brier)は、これらの延長線上に、生物学的見地を基盤とし、システム論と記号論とを結合して、情報に関する新たな理論枠組みとしてサイバー・セミオティクス(Cybersemiotics)を展開している。

数学者ウィナーにより考案されたサイバネティクスは、生物、機械、組織の伝達と制御に関わる科学である。今日、コンピュータが洗練され人間のように振舞うにつれ、サイバネティクスは、情報理論の発展から、人工知能やロボティクスと密接に結びついている。「情報」という語が伝達のサイバネティックな議論に上がってくるが、それは人間や機械が受け取れるデータとして定義されるにすぎない。シャノンの情報理論に従えば、ある信号の確率が高いほど少ない情報量を伝え、確率が低いほど多くの情報量を伝えるというように、情報概念は数学的に確率的なものとして定義された。しかし、このシャノンモデルは、経路、ノイズ、リダンダンシー、フィードバックなどの概念を導入したにもかかわらず、「情報の量」は問えても、「情報の質」までも問うことはできない。つまり、シャノンの情報理論は、メッセージや意味がどのようにして明らかにになり、そして、それらがいかにして人間の伝達事象の

本質を決定するのかということについて何も語らないのである。ブリアはこうしたことに関して記号論的に明らかにすべく、サイバネティクスをサイバー・セミオティクスとして新たに作り直すのである。

情報処理パラダイムの限界は、直感や感情、意図、文脈に応じた意味解釈や自立的な意味生成という情報の生命的側面に立ち入れない点にある。ブリアは、意味を統語論的論理形式で完全に扱うことができるとは考えず、むしろ、意味は生物学的存在と深く関わるものと把握する。そこでは意味作用を分析する学としてパースの記号論および生命記号論が情報論の理論的基盤として援用されている。また、ワイトゲンシュタインの言語ゲームを動物界の前言語的な記号作用にまで拡張する「記号ゲーム」や「パースの習慣形成論」により、記号は動的に意味を獲得するとしている。

<<第 22 回年次研究大会シンポジウム発表要旨>>

客観的解釈の可能性—批判的合理主義における理解の方法—

慶應義塾大学 榊原研互

1. はじめに

哲学における言語論的転回以降、認識論や科学方法論においては、クーン(T. S. Kuhn)のパラダイム論に代表されるように、主観主義的で相対主義的な傾向が強まっている。

このことは私の専門である経営学も例外ではない。経営学では、近年、「組織シンボリズム」の名のもとに、現象学的社会学的方法、エスノメソドロジー、シンボリ

ック相互作用論、ディスコース分析といった解釈学的アプローチが展開され、それが 1 つの支配的なパラダイムを形成するまでになっている。

しかし、ポスト構造主義やポストモダニズムを掲げるこれらのアプローチは、自然科学を志向した従来の科学観を否定する一方で、解釈学が自律的な「学」として満たすべき要件については必ずしも明確に示していない。つまり、それらが一様に合理性や真理、進歩といった概念の使用や、一般法則の定立に対して懐疑的な態度を表明してはいるものの、その代替案としての解釈学の目的と方法——例えば何をもって理解が達成されたと言えるのか、妥当な理解とは何かといった問題——に関しては十分満足な答を提示

していないように思われる。

これは解釈学の存在理由に関わる問題と言えるが、われわれの考えでは、この背景には、一般法則を追求する理論科学と個性記述的な歴史科学との関係をめぐる誤解と、それに加えて「客観性」概念をめぐる混乱がある。そしてこれらの誤解や混乱は、ポパー(K. R. Popper)の批判的合理主義の考えを採用することでよりよく整理できるように思われる。

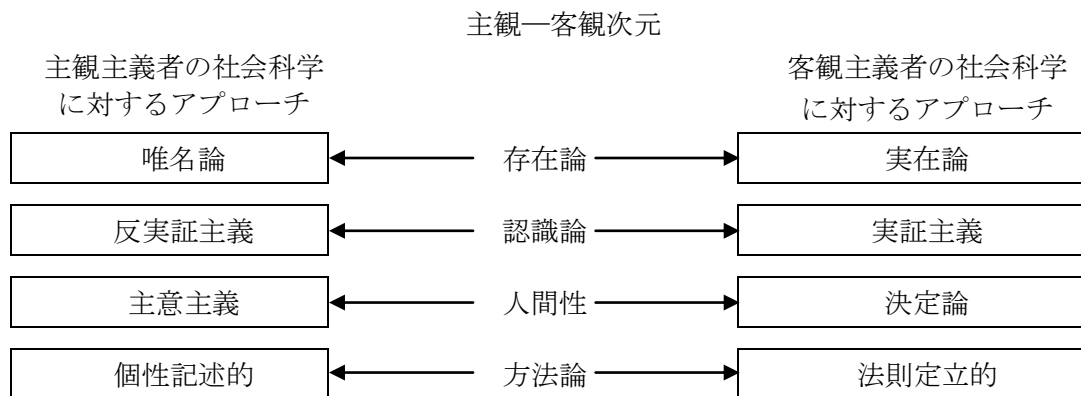
そこでこのことを明らかにするために、本報告では、まず経営学における解釈学的アプローチの一例として組織シンボリズム論を取り上げ、そこにおける問題点を明らかにした上で、ポパーの科学方法論を概観し、彼の客観性概念と説明と理解(解釈)の相違を確認する。さらにヴェーバー(M. Weber)の理解的方法との対比において、ポパーにおける説明科学としての社会科学の可能性を検討し、最後にポパー哲学の存在論的基盤である世界3理論に基づきながら、自律的な理解の学(解釈学)の可能性を明らかにしたい。

2. 組織シンボリズム論における問題点

経営学において解釈学的な組織シンボリズム論が台頭するのは1980年代になってからであり、それは組織論研究においてそれまで支配的であった機能主義的パラダイムに対するアンチテーゼとして現れた。

ここでとくに問題とされる機能主義の立場は、パーソンズ(T. Parsons)の構造機能主義やマートン(R. K. Merton)の機能分析などであるが、このパラダイムに特徴的なのは、社会事象をその内部構成員の意識とは独立に存在する客観的実在にとらえ、その構造と機能との関係を客観的かつ因果的に分析しようとしている点である。つまり、伝統的な自然科学のアプローチと同様に、「主体—客体」の二項対立を前提として、社会現象に関する法則の定立を目指すのがこの立場であり、バーレル(G. Burrell)とモーガン(G. Morgan)は、これを「客観主義者の社会科学に対するアプローチ」として位置づけている(図1)。

図1：社会科学の性質に関する諸仮定を分析するための図式



(Burrell, G. and G. Morgan(1979), 邦訳 6 頁)

しかし、こうしたアプローチに対しては、社会を構成する個々の人間を主体性のない画一的な存在として捉えすぎているという批判に加えて、そもそも観察者は主観を完全に払拭できるのか、「個人は完全に自分の意識とは独立した基準を用いて、組織現象を理解することが可能なのであろうか」といった疑念も投

げかけられている。もしこの批判が正しいとすれば、機能主義パラダイムにおける「客観性」は(およそ実現が不可能と言える)完全な「中立性」あるいは「非党派性」を意味していると言うことができる。そしてこうした批判や疑念が人々を解釈主義パラダイムへと向かわせているのである。

この解釈主義パラダイムによれば、社会的世界は「構成員の意識作用の産物である意味世界」であり、したがって観察者は内部世界の視点から内部者の意識作用を再構成しなければならない。つまり、構成物としての社会的世界はどのように生成するのかを、構成員の意味構成(意味付与)過程に加えて社会的相互作用過程にも注目しながら解明していくことが重要となる。

例えば解釈主義パラダイムの出発点ともいえるシュッツ(A. Schutz)の現象学的社会学によれば、意味の構成には、行為者自身による意味構成としての1次的構成と、行為者の1次的意味構成の観察者による再構成(観察者による他者理解)としての2次的構成が存在し、理解とはこの両者を限りなく一致させることである。そして客観的意味連関としての2次的再構成が適合的だと言えるのは、それが「行為者やその仲間の日常生活の常識的解釈によって理解できる形で再構成される」場合のみであるとされる。

バーレルとモーガンがこれを「主観主義者の社会科学に対するアプローチ」と呼ぶように、ここでは「主体—主体」関係が問題となるだけに、その2次的構成としての解釈も主観の域を出るものではない。しかしそれが単に独りよがりの解釈でよいというわけではない。「適合性の公準」が要請しているのは、解釈された意味連関が広く受け入れられる必要があるということであり、その意味で解釈主義パラダイムにおける客観性とは、間主観性あるいは共同主観性と言い換えることができる。

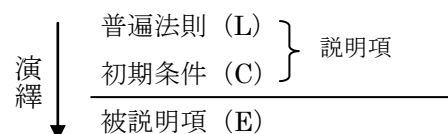
しかし、ただ間主観性という概念を持ち出すだけでは、解釈の妥当性の問題に答えたことにはならない。というのも、どの程度広く受容されれば「適合的」と言えるのか、という問題が提起されるからである。もし理解が共通のフレームワークを前提とするのなら、そのフレームワークの普遍性はどのように証明されるのか、さらに異なるフレームワーク間の理解は不可能なのか(共約不可能性の問題)——このような問題が解決されない限り、解釈は結局主観的なものとどまらざるを得ず、その妥当性、適合性を主張し得ないことになる。

解釈主義アプローチにおけるこうした問題はどのように克服可能だろうか。われわれは次にポパーの批判的合理主義の方法論を概観し、説明と理解の位置づけを明確にしてみたい。

3. 批判的合理主義における科学の方法

何を科学の目的とするかについては多様な立場がありうるとしても、一般に経験世界を対象とする科学(実在科学)の目的は、「現象について満足のいく説明を与えること」だといえる。

ここで説明とは、「なぜ」という問に答えることであり、より詳しくいえば、何らかの説明を要する事柄(被説明項)を普遍法則(=理論)と初期条件のセット(説明項)から論理的に導出することである(演繹的法則論的説明)。つまりどんな説明も、「AならばB」という因果的構造をもつ法則ないし理論を前提とするということであり、その説明の構造は一般にヘンペル・オッペンハイム・モデルと呼ばれる次のような図式で表される。



他方、満足いく説明とは、アドホックでない、あるいは循環的でない説明のことである。それは説明項が独立にテストできるということであり、その理論や法則がよりよくテストされたものであるほど、説明は満足なものとなる。その意味で「満足な説明を与える」という科学の目的は、「真なる普遍法則の探求」と言い換えることができる。

しかし、理論の真理性を究極的に立証することは不可能である。というのも、普遍法則は無限についての主張であるため、有限の観察に還元することができないからである(反帰納主義)。しかし、このことで経験科学の可能性が否定されるわけではない。というの

も、理論はそれと矛盾する1つの事実によって論理的に否定されうるからであり、それは理論の採否にとって経験が一定の役割を果たしうるということだからである。

科学史の多くの事例が示すように、一見確実と思われる理論でもいつかは覆される運命にある。どんな知識も誤りうるという意味では暫定的な仮説以上のものではない(可謬主義、仮説主義)。したがってその真偽を確かめるために、われわれは理論の不断のテストを行う必要がある(批判主義)。そしてそれが可能になるためにも、理論は経験によって反駁される可能性、すなわち反証可能性をもたなければならないのである(反証主義)。

さらに、理論が仮說的性格をもつということは、常によりよい理論に取って代わられる可能性、すなわち認識進歩の可能性が開かれているということでもある(認識進歩主義)。

要するに、ポパーにあって科学の方法とはすなわち批判的方法であり、科学の合理性、客観性はまさに「批判可能」という事実にあるのである。言い換えれば、客観性とは「真理」を意味するものではなく、また中立性、非党派性、あるいは「多数の人々に受容されている」ということでもないということである。

4. 理論的科学、歴史的科学与歴史解釈

先述のように、科学的説明とは「なぜ」という問いに理論をもって答えることであるが、演繹的法則論の説明の構造は、歴史研究においても普遍法則が不可欠であることを示している。かのヴェーバー(M. Weber)は、「精密自然科学にとっては、『法則』が普遍妥当的であればあるほど…価値が高い(が)、…歴史現象をその具体的前提において認識しようとする研究にとっては、もっとも普遍的な法則は、内容がもっとも希薄であるから、通例価値に乏しい」(Weber, M. (1904): 邦訳 91 頁)として自然科学的研究と社会科学的研究の相違を強調したが、ポパーによれば、このことは関心の相違にすぎず、科学的説明の論理構造は自然科学と社会科学とを問わず同一である。すなわち、先に掲げた演繹的法則論の説明図式に

において、科学者が普遍法則のテストに関心をもつか、それとも特称的な初期条件のテストに関心をもつかによって、理論的科学と歴史的科学与とを区別することができる(Popper, K. R.(1957): 邦訳 216 頁以下参照。これにしたがえば、自然科学、社会科学それぞれに理論的科学と歴史的科學が想定できる)。

より詳しくいえば、理論的科学の場合は、普遍法則と初期条件を所与とし、そこから導出される予測を事実と照らし合わせることによって法則の真偽をテストするのに対して、歴史的科學の場合、説明されるべき事態(被説明項)とあらゆる種類の普遍法則を所与とし、その事態を惹き起こした特定の原因(特称的初期条件)を見出してそれをテストするのである(その意味で工学も歴史的科學といえることができる)。

たとえば、「モーツァルトはなぜ死んだのか」という歴史的ケースを説明する場合、「人は病気で死ぬ」「人は毒で死ぬ」…といった多様な(時には瑣末的な)普遍法則を前提として、実際に何がモーツァルトの死因だったのか(特定の初期条件)をさまざまな資料に基づいて検討することが重要となる。その説明も推測に過ぎないことから、われわれは初期条件のテストを通して(たとえば資料の信憑性の批判的吟味を通して)歴史的説明の改善を図ることができるのである。ここで注意すべきは、理論的科学のみならず歴史的科學も、たとえそれが明示的に意識されなくても、常にテスト可能な普遍法則を前提としているということである。

もちろん、歴史学では意識的に選択的見地が導入されることがある。およそ膨大な資料の洪水に押し流されないためには、それらを選択し整理する観点が必要である。しかし、こうした選択的見地が常にテスト可能なものとはかぎらない。たとえばある種の進歩史観は、それを支持するように見える事実が山ほどあろうと、それ自体を反証することは不可能である。ポパーは、こうした歴史観が興味深いものであることを認めつつも、それがテスト可能な仮説として定式化しえない場合は「歴史的解釈」と呼ぶことを提案する。つまり、こうした歴史学は「科学」と異なるものとして位置づけられるということである。

(Popper, K. R.(1957):邦訳 226 頁以下)。

4. 社会科学の方法と批判的合理主義

ところで、このような批判的合理主義の方法論に対し、それは自然科学を志向するものであって社会科学には適用できないと主張する人も少なくない。彼らによれば、社会科学が物理学に匹敵するほどの理論体系をいまだにもちえていないのは、何よりもその対象の性質に関して自然科学と社会科学との間に本質的な相違があるからである。

とりわけ社会のもつ根本的錯綜性や人間の主体性や自由といった要因は、社会科学における一般化や実験、あるいは予測を著しく困難にするために、社会科学では仮説演繹的方法とは別の方法が採用されるべきことが主張されてきた。

先にあげた解釈主義パラダイムもまさにそうした流れの1つであるが、たとえばかのヴェーバーも、社会科学においては客観的に観察可能な外的な要因(事実)の因果分析では不十分であり、動機や意図といった内的な意味連関の解明によって行為を説明する必要性を訴えた。そしてヴェーバーは、純粋に思惟による極限概念としての理念型の構成と、それに基づく理解の方法の採用によって、歴史的事実の個性的描出が可能になると主張したのである。

では、こうした議論に関して批判的合理主義ではどのように考えるのだろうか。

まずポパーは、社会生活における人間的要素が究極的に不確かで気まぐれの要素であり、完全に統御することが不可能だと述べている。しかもそれが科学的に統御可能と考えることはむしろ好ましくないとさえ主張する。というのも、もしそれが完全に統御されるならば、それは人間の自由を抹殺することを意味し、ひいては科学を壊滅させることにつながるからである。

しかし、人間的要素のそうした不確実性を容認しながらも、ポパーは、社会科学も自然科学同様、仮説演繹的方法と批判的テストの方法が適用できると主張する。というのも、人間は多かれ少なかれ「合理的」に行動するからであり、そこに「状況の論理」を採用

する余地が残されているからである。

ここで「合理的」とは「状況適合的」という意味であり、「状況の論理」とは、社会現象を人間の心理的要因ではなく、できるかぎり客観的な状況要因に還元して説明すべきという一種の方法論的要請である。たとえば、人々のもつ願望、動機、記憶、連想といった心理学的に見える要素は、「○○という客観的目標を追求する状況にある人」「××という情報や知識を与えられた状況にある人」といったように状況の要因に変換される。これにより、「A という状況に置かれた人は B という行動をとる」というテスト可能な命題が形成され、因果的、演繹的な説明が可能となるのである。

これは「心理学にとらわれない方法論的個体主義」と呼ぶことができるが、社会科学が心理学に還元できない、あるいは心理学が社会科学の基礎とはなりえないのは、1つには、意識や願望といった人間の心理的要因が社会制度や慣習といった状況要因に大幅に依存しているからであり、もう1つには、意図的な人間行動の「意図せざる」結果を心理学では十分に説明できないからである。

しかもポパーによれば、この状況分析は「合理的かつ経験的に批判可能で改善可能」という点で心理学的アプローチよりも優れている。というのも、心理的要因に訴える心理学的説明が合理的議論によって批判できるケースがきわめて少ないのに対し、状況分析ではまさに客観的な状況が引き合いに出されるからである。

もちろんポパーも、「すべての心理学的要因を状況の記述に編入することは不可能」なことを認めている(Popper, K. R.(1945):邦訳 95 頁)。その意味で、状況の論理に基づいて構成される仮説も「近似的なモデル」にすぎないとも述べている(Popper, K. R.(1957):邦訳 212 頁)。しかし、われわれの考えによれば、このことは仮説演繹的方法の社会科学への適用を不可能にするものではない。というのも、人間の自由と開かれた世界を前提とすれば、人間行動を完全に状況要因に還元して説明することはできない相談だからである。

5. 自律的な解釈学の可能性

これまで説明科学としての社会科学の可能性を論じてきたが、このことは必ずしも解釈学ないし理解の学としての社会科学の可能性を否定するものではない。しかし、ポパーが理論的科学および歴史的科学与歴史的解釈とを峻別したように、そこには次元の異なる問題がある。もしわれわれが自律的な解釈学について語りたいと思うならば、行為の意味を(説明ではなく)理解するとはどういうことか、理解の妥当性はどのように保証されるのか、あるいはより良い理解とは何かなど、解釈学の課題と方法について明確な答を提示することが重要となろう。

われわれの考えでは、ポパーにおいてこのことの手掛かりを与えてくれるのが世界3の議論である。そこで以下、この世界3の理論とポパーにおける理解の方法を簡単に整理してみたい。

ポパーの世界3の理論とは、哲学における従来の心身二元論を批判的に拡張、発展させたものであり、多元論的世界観を前提としながら、世界または宇宙が3つに区別できるという存在論の議論である。その3つの世界とは、すなわち物理的対象または物理的状态の世界としての「世界1」、意識の状態または心的状態、または行動性向の世界としての「世界2」、そして言明それ自体あるいは思考の客観的内容の世界としての「世界3」であり、しかもその場合、世界1と世界2、世界2と世界3はそれぞれ相互作用でき、世界1と世界3は世界2を媒介として相互作用できるというものである。

ここでとくに重要なのは世界3の存在であるが、ポパーによれば、この世界3は、人間言語の進化——叙述的機能と論証的機能の発生——とともに発生した身体外的言語体系と特徴づけることができ、その対象には問題、理論、批判的議論だけでなく、「もろもろの道具、制度、芸術作品といった人間精神のすべての産物を含めることができる」(Popper, K. R. (1976): 邦訳 267 頁)。しかも世界3は本質的に人間精神(世界2)の産物であるけれども、同時にそれは世界2に対してフィードバック効果をもたらすという意味で大幅に自律的なのである。

そしてポパーによれば、この世界3は以下のような推測と反駁の図式に従って自律的に成長、進化する。

$$P_1 \rightarrow TT \rightarrow EE \rightarrow P_2$$

ここで P_1 はわれわれの出発点となる問題、 TT は暫定的解決、 EE は批判による誤りの排除、 P_2 はその結果生じた新たな問題を表しているが、この図式が意味していることは、人間精神の産物としての理論、知識、道具、制度などはいずれも問題解決の試みと理解でき、しかもそれは暫定的な性格を持ち、試行と誤り排除によってよりよいものに発展、進化しうることである。

ではこの世界3理論に基づく理解の方法とはどのようなものだろうか。

ポパーによれば、人間行為を理解するとはすなわち人間精神の産物を理解することである(Popper, K. R. (1972), 207 頁)。しかしその場合、解釈主義パラダイムが採用するような再演や追体験といった主観的で心理学的なアプローチでは不十分である。というのも、歴史家の能力をはるかに超えるような行為がありうるからであり、それが再演をそもそも実行不可能にするからである。

他方、もし世界3の自律性と実在性を前提とすれば、理解のそのような主観的過程を世界3の諸対象の操作によって置き換えることができる。つまり、人間精神の産物としての理論、知識、道具、制度などがいずれも問題解決の試みだとすれば、その意味とはそれが生み出された問題状況を再構成することで理解できることになる。

この場合、問題状況とはすなわち論理的な矛盾であり、それを再構成するとは、世界3の諸対象の論理的で客観的な関係を問題にするということである。その意味で、このように形成される理解の仮説はまさに批判可能で改善可能であり、それゆえこうした理解の仮説自体もまた先の推測と反駁の図式にしたがって進化しうるのである。

言い換えれば、(1) P_1 はわれわれの出発点となる理解の問題であり、(2) TT はわれわれが推測的に再構成した暫定的解釈であり、(3) EE はわれわれ

の推測、暫定的解釈の厳しい批判的吟味から成る。つまり、われわれは自分たちの推測を、それが問題状況の文脈に十分に適合するまで反駁しようと努めなければならない、そのために、たとえば記録的証拠を批判的に使用しなければならない。(4)そしてこうした批判的吟味の結果、新たな理解の問題 P_2 が生じるのである。

このように見ると、ポパーにおける理解の方法とは、何よりも世界3を対象とし、それをその進化の図式にしたがって再構成することだといえ、ここに経験的実在世界(世界1)を対象とする経験科学とは異なる解釈学の独自の課題と方法があると考えられているのである。

<参考文献>

Adorno, T. W./ H. Albert/ R. Dahrendorf/ J. Habermas/ H. Pilot/ K. R. Popper (1969), *Der Positivismusstreit in der deutschen Soziologie*, Neuwied/ Berlin. (城塚登・浜井修訳『社会科学の論理——ドイツ社会学における実証主義論争』河出書房新社、1979 年)

Burrell, G./ G. Morgan (1979), *Sociological Paradigms and Organizational Analysis*, London. (鎌田伸一・金井一頼・野中郁次郎訳『組織理論のパラダイム』千倉書房、1986 年)

Popper, K. R. (1945), *The Open Society and Its Enemies*, London. (小河原誠・内田詔夫訳『開かれた社会とその敵』未来社、1980 年)

Popper, K. R. (1957), *The Poverty of Historicism*, London / Henley. (久野収・市井三郎訳『歴史主義の貧困』中央公論社、1961 年)

Popper, K. R. (1959), *The Logic of Scientific Discovery*, London / New York. (大内義一・森博訳『科学的発見の論理』恒星社厚生閣、1971 年)

Popper, K. R. (1972), *Objective Knowledge: An Evolutionary Approach*, Oxford. (森博訳『客観的知識——進化論的アプローチ——』木鐸社、1974 年)

Popper, K. R. (1974), “Autobiography of Karl Popper”, in: Schilpp, P. A., *The Philosophy of Karl Popper*, La Salle, pp.3-181. (森博訳『果てしなき探求——知的自伝』岩波書店、1978 年)

榊原研互 (2009)「経営学の方法論的基礎づけ——批判的合理主義の適用可能性に関する一考察——」『経営哲学』第6巻1号(2009年7月), pp. 41-55.

坂下昭宣 (2002)『組織シンボリズム論 論点と方法』白桃書房。

高橋正泰 (2006)『組織シンボリズム メタファーの組織論』(増補版)同文館。

Weber, M. (1904), „Die »Objektivität« sozialwissenschaftlicher und sozialpolitischer Erkenntnis“, in: *Archive für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, Bd. 19, Tübingen 1904, S.22-87. (富永祐治・立野保男・折原浩訳『社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」』岩波書店、1998 年)

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「記号論の個別科学への応用と課題—消費の解読のために—」

名古屋商科大学 松尾洋治

従来のマーケティングにおいて、長らく、製品の買い手である消費者の行動(とくに購買行動)を理解し、分析するための枠組みを与えてきたのは、経済学(新古典派経済学)や心理学(行動主義心理学、社会心理学、認知心理学など)の理論であった。ところが1980年代に入ると、それらとは異なる分析枠組みが導入された。それは記号論^①、より厳密に言えば、

^① いわゆる学問としての「記号論」には、大きく C・S・パースを創始者とする「記号論 (semiotics)」と F・de・ソシュ

フランスの文芸評論家R・バルトや社会学者J・ボードリヤールらの文化記号論であった。

なかでもボードリヤールの消費社会論は現代的な消費を解説するための基礎理論として、1980年代初頭においてマーケティング実務家／研究者に受容された。実際に、1979年にボードリヤールの『消費社会の神話と構造』(1970)が日本に紹介されて以降、「消費社会」や「消費」というタイトルを冠した著作が数多く出版された。そして、そのほとんどがボードリヤールを下敷きにして日本の消費社会を語ったと言われている(佐藤(1992),p.10,15)^②。

ボードリヤールの消費社会論とはどのような内容の言説なのだろうか。かつてK・マルクスは、「労働の再生産のため」に消費がおこなわれる(また消費されるモノ(製品)は使用価値をもつ)と主張したが、このように消費を消費主体の欲求とモノ(製品)の使用価値との間に生起する事象として把握しようとする経済学的言説(同様に心理学的言説)の誤りをボードリヤールは批判する。溢れんばかりの種類と量のモノとそのイメージに取り囲まれた現代においては、もはやそのような生活維持のための消費はおこなわれない。消費とは他者とのコミュニケーションをとる行為(言語活動)であり、購入されるモノ(製品)はコミュニケーション手段(記号)であるとボードリヤールは主張するのである。

消費を通じてわれわれは他者にメッセージを発し、あるいは逆に他者からメッセージを受け取る。例えば、特定のファッション・ブランドを購入するのは「身を守るため」でも、「防寒のため」でもない。自分が「どういう人間かを証明するため」や「自らの個性やアイデン

ティティを他者に伝えるため」というわけである。ファッションに限らず、われわれの周りにあるモノやサービスはみな(あるいは、人間関係までもが)記号としての役割を果たしている^③。われわれは、他者にどう見られているのか、すなわち他者の視線を常に気にしながら生活しなければならない。このように現代の消費が(ホモ・エコノミクスのな)自立した個人として営まれるのではなく、他者との「関係」によって拘束(強制)されているという現代の社会生活を、ボードリヤールはペシミスティックに描き出したのである。

以上のような記号論的言説に依拠する形で、マーケティング研究においてどのような応用研究がなされているのかを確認しておこう。マーケティングでは、主として、実際の企業の製品、あるいは広告が記号として消費者にどのように受け止められ、また、そこからどういった意味が導出されているのかを解説しようとする。例えば、星野克美(1984)は、1981年に本田技研工業から発売され、若者の間でたいへん人気を博した小型自動車シティを取り上げ、その製品がヒットした原因について記号分析をおこなっている。シティがヒットした原因について、次のように述べられている(p.128)。

このシティ・カーが、街の中をすばやく駆け抜けていく有り様は、何やら玩具のようなイメージをささげ彷彿させないわけでもない。乗用車はただでさえ“愛車”といわれるように呪物性を濃厚に備えているが、“シティ”の本質は親しみ愛すべき玩具のようなイメージ的存在——つまり、愛玩物のアナログ的なものである。機能的でありながら、機能主義を脱した特有のデザインが、人格的・愛玩物的イメージを醸し出して消費者の無意識に訴求する。とりわけ・・・(中略)・・・若い消費者にとっては、それはたんなる乗用車ではなく愛玩物

ールを創始者とする「記号学(semiology)」がある。バルトやボードリヤールの研究はソシュールの「記号学」に由来するにもかかわらず、マーケティング研究ではそれらを総称して「記号論」と呼ぶことが多い。本稿でもその慣例に倣うことにする。

^② また、当時は、浅田彰の『構造と力』(1983年)が出版され、いわゆる「ニュー・アカデミズム」と呼ばれるブームが生じた時期であった。こうしたポスト構造主義の知的流行がボードリヤールやバルトの言説を流布させるきっかけになったであろうことは容易に推測される。日本において構造主義・ポスト構造主義が受容される過程については、『季刊 思潮』(1990年 No.8)、とくに浅田彰作成の「昭和批評年表」(pp.6-7)と蓮實重彦・三浦雅士・浅田彰・柄谷行人による「共同討議・近代日本の批評・第4回」(pp.8-48)に詳しい。

^③ この種の消費を描いた小説として、田中康夫著『なんとなくクリスタル』がある。同小説は1981年に発売され、たちまちミリオンセラーになった。そこでは、最先端のファッションやブランドに囲まれ、生活する若者の日常が描かれているが、その小説のなかでは記号として消費されるのはモノだけでない。主人公にとって、彼女の友達やボーイフレンドまでもが記号になる。彼女にとって、友達や彼氏は「～に住む」、あるいは「～の大学」に通っている人であり(例えば、～の中に高級住宅地や高学歴が入る)、彼女の存在を証明する記号表現(シニフィアン)として描かれている。

への接触の欲望——フェティシズム——を隠喩的に
体化した呪物的存在なのである。

星野によると、シティがヒットした原因について、シ
ティが若者にとって玩具のようなものとして受け止めら
れ、かつ、その記号は彼らのフェティシズムを反映し
たものだったからだと説明される。

このような記号分析は、確かに経済学や心理学的
な研究によっては捉えられなかった消費者の欲望を
明らかにしようとするという点でユニークであるし、魅
力的な試みである。ところが、提出された解釈を見て
みると、「主観的で、勝手気ままな批評」といった印象
がどこか拭いきれない(あるいは、そう受け取られても
おかしくないように思える)。というのも、なぜそのよう
に解釈したのか、解釈の根拠について、星野は経験
的な証拠を提出しないし、そればかりか、解釈の根拠
を消費者の隠れた欲望(フェティシズム)に結びつけ
る、こうした説明の仕方に恣意性を感じてしまうので
ある。また、消費者の欲望を精神分析学的用語に還元
したところで、マーケティング実践にとって役に立つ
アドバイスができるとは思えない。

となると、安易に精神分析学的な解釈の方法に頼
るのではなく、K・R・ポパーの「状況の論理」によっ
て示されているような状況記述的な歴史的解釈の方が、
消費者の事例研究にとっては実り多さがあるのでは
ないだろうか。つまり、消費者の欲望や選好を形成す
る、あるいは、消費者の記号解釈を方向付けるような
構造(ボードリヤールでいうところの「関係」)とは何な
のかを外部の状況とともに地道に探っていくことの方
がマーケティング実践にもたらす政策的含意はよほ
ど多いと思われる。

■ 参考文献

- 浅田彰 (1983)『構造と力』筑摩書房。
J・ボードリヤール (1970)『消費社会の神話と構造』
今村他訳、紀伊国屋書店。
星野克美 (1984)『消費人類学』日本経済新報社。
佐藤真 (1992)「消費社会論を超えて」,ポスト消費
社会研究会編『消費の見えざる手』I&S,所収。

田中康夫 (1981)『なんとなくクリスタル』河出書房。
雑誌『季刊 思潮』(1990) ,No.8.

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「パースの知識進化の記号論とその現 代的展開について」

江川 晃 (日本大学)

C. S. パースの記号論は、彼の連続主義の哲学と
深く関係している。パースは、内的世界(情態、精神、
意志、思考)と外的世界(物質、エネルギー、法則)と
の間には連続性があると考えていた。それらを結び
付ける過程が、まさに記号過程、意味作用の過程で
ある。彼にとって、知識は、記号の進化に伴って生じ
る進化的実在とみなすことができよう。そこにおいて
は、伝統的な観念論と実在論という二元論的認識図
式は、連続主義により無意味なものとなる。このように、
パースの記号論は、ひとつの解釈として、「知識進化
の記号論」と把握することが可能であろう。

(1) 記号の定義

パースは、初期(1867 年)から記号の定義を試み
ているが、ここでは晩年(1908 年)になされた、二つの
対象と三つの解釈項に関連させた記号の定義を見
てみよう。

「私は記号を次のものとして定義する。一方ではあ
る対象によって規定され、他方では人の心にある観
念を規定し、そのため、私が記号の解釈項と名付ける
この後の方の規定作用がその対象によって間接的に
規定されているようなもの。それゆえ、記号はその対
象およびその解釈項と三項的な関係を持つ」(8.343)

たとえば、ハンターが森の中である樹に傷がつい
ているのを見つけ、この近くに鹿がいることを認知し
たとしよう。この場合、「樹の傷」(記号)は、「鹿の存
在」(対象)に規定され、他方ハンターの心のなかに

ある「ハンターの知識・経験」という観念(解釈項)を規定し、後者の規定作用では「鹿の存在」(対象)によって「ハンターの知識・経験」という観念(解釈項)は間接的に規定されることになる。ここでは、記号は対象

に対して受動的であるように、解釈項も記号に対して受動的である。しかし、解釈項は表象=再現として対象と記号に対しては能動的である。(図 1 参照)。

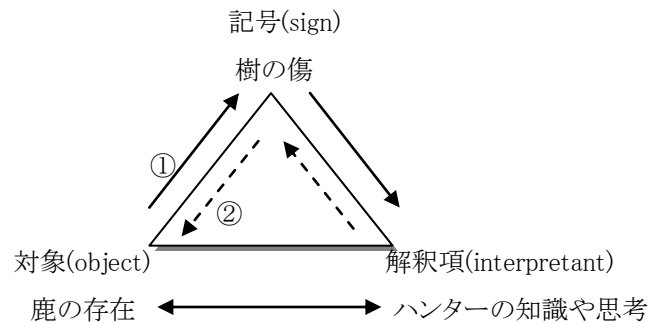


図 1

ところで、矢印①は、「鹿」が「樹の傷」を生むことを(2項的)、そして矢印②は、ハンターに対し「樹の傷」が「鹿の存在」(3項的)を現実として能動的に表象=再現することを、それぞれに示している。つまり、ここには①鹿(対象)→ 樹の傷(記号)、②鹿(対象)← 樹の傷(記号)という二つの関係がある。以上のことは、「記号(樹の傷)をつくるもの」としての対象(鹿)と「記号(樹の傷)によりつくられるもの」としての対象(鹿の存在)という二つの対象のあることを暗示している。パースは、以下のように述べている。

「しかし、通常二つの対象を指摘することが残っている。つまり、直接的対象(Immediate Object)、記号自身が己れを表意するおりの対象で、そのためのその存在が記号による表意作用に依存しているような対象を、力動的対象(Dynamical Object)、つまりなんらかの手段でなんとか記号を規定して自分を表意させるようにしている実在から区別する必要がある」(4.536)

ここで二つの対象とは、直接的対象(IO)と力動的対象(DO)である。「直接的対象」とは、記号に表意されたものとしての対象であり、我々に現前するイメージであり、それゆえ、ある種の仮想性(バーチャリティ)を持つと考えられる。「力動的対象」とは、記号が

表現できず、ただ指示され、見つけだすよう解釈者に任せることしかできない実在を意味している。また、探究を導く目的因として実際には効力を持っているが、直接現前しない対象であり、究極的意見の一致において現れるであろう直接的対象の理想的限界とみなされうる。

パースは、記号過程の目的論的構造に従い、解釈項を以下の3つに分類する。

「同様にまた、直接的解釈項つまり記号のなかで表意されあるいは意味される解釈項を、力動的解釈項つまり記号によってところの上に実際生み出される効果から区別する必要があるし、さらに、この二つの解釈項を、最終的(標準的)解釈項つまり思考が十分発展した後であれば記号によって心の上に実際生み出される効果から区別する必要がある」(8.343)

直接的解釈項(Immediate Interpretant)とは、「記号そのものの正しい理解のなかで現示される解釈の可能性である」。力動的解釈項(Dynamical Interpretant)とは、「記号が記号として現実に規定している実動的効果」、すなわち実際に形成されたすべての解釈項である。また、最終的解釈項(Final Interpretant)とは、「記号が自分自身をその対象として関連付けられているものとして表意しようとする場

合のその様式のことである」。それは、記号解釈の目的にとっての理想的解釈項である。

(2) 記号過程の進化モデル

以上のパースの記号論の枠組みから、一つの解釈として、記号過程の進化モデルを考えることが可能であろう。例えば、ある人が森の中へ入って、樹の傷を見かけたとする。その人の解釈項のレパートリーには、ハンターの解釈項は存在していない。そこで、まずその人は、固有の質的可能性である直接的解釈項により、知覚した樹の傷を「単なる樹の傷」(IO_1)として解釈するであろう。次に彼が「この樹の傷はいったい何か」という疑問を抱いたとする。そのとき、この樹の傷という記号を解釈するためにさらに別の解釈項が、記憶の奥から連鎖し、いくつも意識の俎上に上がる。これが実際に形成された力動的解釈項である。この段階では樹の傷を仮説的(abductive)に「蹴り

の痕」(IO_2)や「車の衝突」(IO_3)とみなすかもしれない。その後、営林署の職員から鹿はこのような樹の傷をつけると、教えられたとする。つまり、他人から知識を得ることにより、彼の中に新たな解釈項が取り込まれたことになる。この場合、これは最終的解釈項と一応みなすことができる。こうして、彼は樹の傷という記号が鹿の存在を表すものと理解する。したがって、記号過程の進化は、實在(外的世界)とわれわれ(内的世界)とを関連付けるインターフェイスとしての構造を有する記号場とみなされ、われわれの認知および理解は、直接的解釈項、力動的解釈項を経て最終的解釈項が出現することにより、記号過程の内にある直接的対象の発展に伴って、力動的対象(DO)が現れてくるという記号過程の進化であると考えられる。

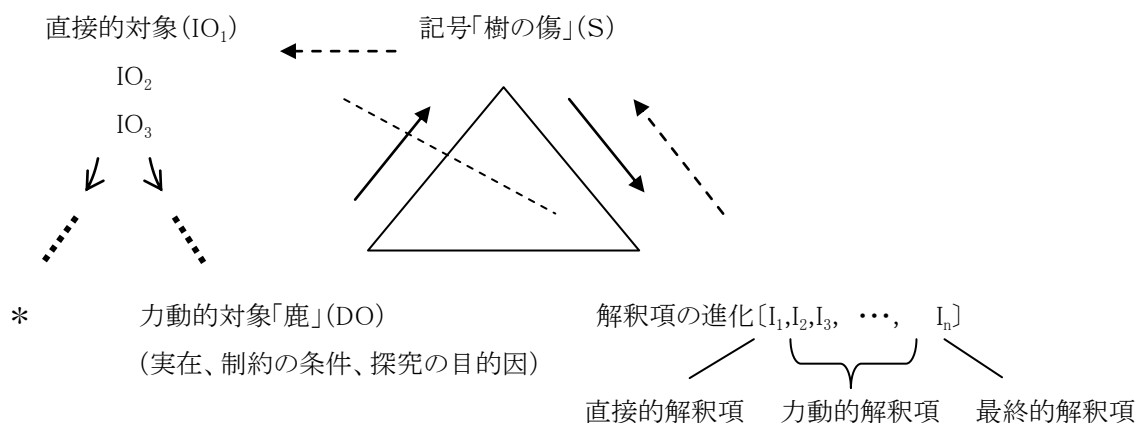


図2 記号過程の進化モデル

しかしながら、以上のような記号過程の進化は、本来、様々な分岐の可能性を持ちうる。力動的対象から記号が作られ、その記号からある解釈項が生じ、その解釈項から直接的対象が惹起されるとき、それぞれの場合に確率が存在することになる。つまり、記号過程の進化は、選択肢の多様性をもち、現実の思考・認知においては、必ずしも力動的対象(實在)へ至るとは限らない場合がありうるのである。

(3) 進化的實在論

パースにとって、「探究」とは疑念から信念に至る思考過程である。ハウスマンは、探究行為における實在把握を「進化的實在論」として解釈する。当然ながら、この「進化的實在論」は記号論の観点から論究することができる。

エーコが言うように、「探究」は科学的知性の共同体において営まれる無限の記号過程(unlimited semiosis)の連鎖であり、それは解釈項の進化により遂行される。先述したように、直接的対象は、記号に

よる表意作用に依存する対象であり、力動的対象は記号を規定する実在である。ある所与の記号の解釈項はそれぞれ、次の記号過程の記号となり、無限の記号過程が続く。科学的探究は、共同体において、最終的解釈項の中で生じる力動的対象を発見しようとする目的により導かれる。力動的対象は記号を生じさせる源であり、その解釈を制約するものである。

ところが、同種の解釈行為が、知覚と想像の結合のもとで何回も繰り返されるとき、そこから未来における同様な状況において、現実と同様な仕方で行動する傾向が生じる。これがパースのいう「習慣」(habit)の概念である。パースは、行動と思考の連鎖の全体が記号過程であるとし、その底部には「習慣」があると考えている。

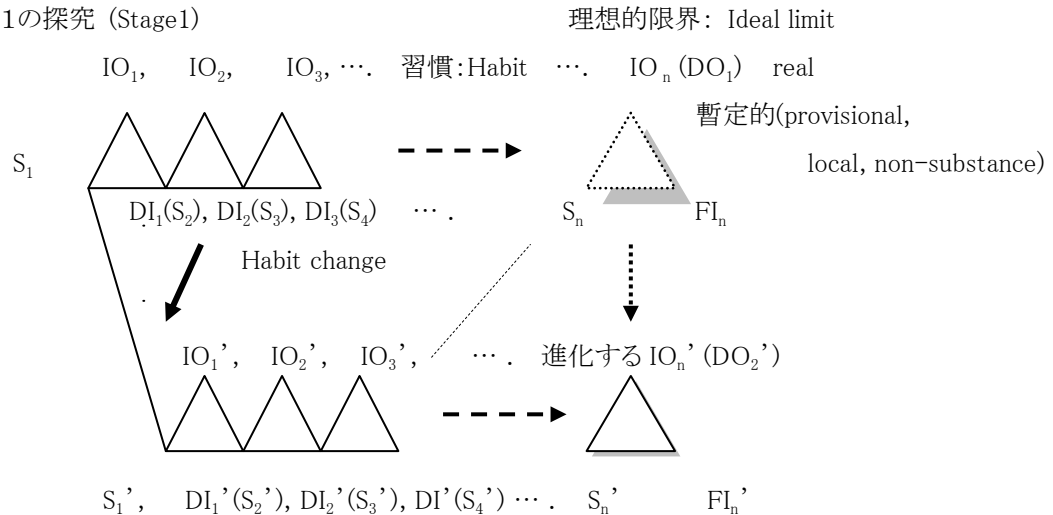
最終的解釈項は、時間序列的意味で最終ではない。記号過程は絶えず終了するが、諸々の記号体系からなる体系は、実際には世界へと作用を及ぼし、それを修正させようとする。この修正行動が今度は記号へと転じ、新たな記号過程の系列(新たな習慣)を生じさせる。これが「習慣変更」であり、習慣を形成する傾向性そのものである。したがって、「習慣変更」とは私たちが以前に経験した事柄やある意志をもって行動したことが原因となって生じる行動傾向の修正を意味するとともに、それは絶えず自らを修正し統制しつつ未来へと発展する科学的合理的思惟をつくる行動の原理とみることができる。

最終的意見の対象は、解釈項の進化をヒューリスティックかつ統制的に導く理想的限界である。力動的対象は探究過程のシステムの外にあるが、それに付随して指向されるところの究極的論理的解釈項である習慣の確立にのみ姿を現す実在と考えることができる。われわれは、「最終的意見」を「終結付ける意見」とみなすことによって、一連の探究において想定される力動的対象を、ある習慣の確立に生じる暫定的な実在として把握することができる。つまり、実在は暫定的であるゆえ、新たな記号過程の系列を生じさせる別の習慣の確立(習慣変更)に姿を現す実在がありうるのである。

(4)場としての記号空間と仮想的実在

つぎに、力動的対象(実在)の進化について考察しよう。前述したとおり、探究は、科学的知性の共同体の内で営まれる、一連の無限記号過程と把握された。それは解釈項の進化を通じて遂行されるものである。いま、図3を参考にして、 DO_1 (stage 1)から DO_2 (stage 2)の進化を考えてみる。ここで重要な点は、同一の探究系列において新たな力動的対象が姿を現す、ということではない。むしろ、他の探究系列に新たな力動的対象が生じる、と考えるべきである。 DO_1 は、stage 1でのみ考えられうる第1の探究系列を導くところの理想的限界である。実際の探究行為は、この DO_1 を想定して記号解釈が行なわれる。ところが、探究の進行が限りなく想定された DO_1 に近づいた場合、つまり、ひとつの収束にある探究が到達すると、新たな探究が以前の探究のどこかで枝分かれし、新たな方向性を模索しだす。 DO_2' は、この第2の探究系列の進行する中でのみ姿を現す、stage 2における実在であり、新たな探究における記号解釈に制約を与える理想的限界である、と考えられる。重要な点は、 DO_2 は第2の探究系列が進行するstage2に立つとき初めて存在し、stage1の時点ではけっして存在し得ない、ということである。ここにおいて、 DO_1 は暫定的な、ローカルな、いわば仮想的な実在として変更されるのである。

1. 第1の探究 (Stage1)



2. 第2の探究 (Stage 2)

図3 思考-記号空間(記号場)

以上のことはパースの進化的実在論と深く関係する。共同体の究極的意見の一致としての、第一の探究の進展に伴って出現する観念論的実在と、探究の各段階において、探究を導く制約として機能を果たす力動的対象としての実在論的実在とは、一見、対立した存在である。しかし、第二の探究において新たな力動的対象(DO_2')が生じるとき、この2つの実在の間にある関係性が消滅する。この場合、第一の探究の導き手としての DO_1 は、実在論的実在としての使命を終え、代わって DO_2' がその役割を担うことになる。つまり、力動的対象は進化するのである。パースの関心は、おそらく、探究という連続的記号過程において、究極的論理的解釈項としての習慣の確立、および、その不断の更新的習慣変更とに姿を出現させる実在にこそ向いていたと考えられる。

記号過程の進化は、連続する三角形の格子上に、思考-記号空間を構成すると考えられる。さらに、それは、思考-記号空間上の記号場とも見ることが出来る。探究の第一の系列において、一つの収束に至ろうとすると、そこで生じようとするセミオーシスの分岐は、本来、様々な箇所で起こり得るゆえ、あたかも三角形で分割された様な格子空間構造が形成される。つまり、ここに三角形分割された思考-記号空間が構成され、探究という複雑な思考過程は、いわば

三角形分割された空間上に定義された距離を移動する経路になる。記号過程の三角形格子における進化モデルを思考過程に援用するならば、格子によって造られる多様体が持つ幾何学の記号論的可能性が考えられる。また、記号場を思考-記号空間上に導入する記号論の発展的解釈と経路積分との関連性を考慮するならば、以上のことは、VRの構造分析や記号論から脳のモデルへアプローチするneuro-semioticsに示唆を与えるものと考えられる。

最後にパースとソシュール記号論の根本的相違について二つの点に言及する。ひとつは、私見によれば、パースの記号の概念は人間を超え、生物や物理的過程に対しても応用が可能であり、自然科学を網羅することができるが、しかし、ソシュールの記号論は人間という種内の言語の発達やその結果として生じた文化一般を対象とした点である。記号過程を広く捉えたパースの汎記号論を考慮すると、ソシュールの記号論は、人類記号過程を扱ったものと考えられよう。もうひとつは、ソシュールは、実体(客観)と意識(主観)とを媒介するものとして記号を考える「実体論的認識」から、両者を関係性の場において構成し生みだすものとして記号を把握する「関係論的認識」への転換を強調した。それに対し、パースは、連続性の哲学により、認識自体を実体論と関係論とに

分離せず、知識進化の記号論あるいは進化的実在論という形で、両者をセットして内含する場的な記号論を目指したと考えられる。

<参考文献>

- 1) John Deely, "Basics of Semiotics" Indiana University Press, 1990.
- 2) Carl R. Hausman, Charles S. Peirce's Evolutionary Philosophy, Cambridge UP, 1993.

3) T. L. Short, "Peirce's Theory of Sign" Cambridge University Press, 2007.

4) 坂本百大「場の認識論」『数理科学』1987, 292号

5) Akira Egawa, "C. S. Peirce's Evolutionary Realism and Cognitive Field" Proceedings of 7th International Congress of The International Association for Semiotic Studies, 1999.

<<連載>>

対話によるポパー入門

蔭山泰之

登場人物

雄太：大学を卒業して某電機メーカーに勤務する会社員。慶介の大学時代からの親友。

慶介：某大学大学院生。カール・ポパーを中心に科学哲学を研究している。雄太の大学時代からの相談相手。

From: yuuta@xxxx.com

To: keisuke@xxxx.com

Subject: ポパーについて教えて！

慶介へ

久しぶり。元気でやってる？

今度、用事があって東京に行くことになったから、会いたいんだけど、ちょっと時間をとってくれないかな。じつは、まえから慶介に聞きたいと思っていたことがあるんだ。ポパーのことなんだよ。

最近ある雑誌であの有名な大金持ちの投資家ジョージ・ソロスの記事を読んでいたら、ポパーはソロスの先生だみたいなことが書いてあったんだ。それに、ほかのところでポパーの名前を見たことがあったんでまえから気にはなっていたんだ。

慶介は、ポパーにはずいぶん詳しくあったよね。まえ慶介からポパーの話を聞いたときは、あんまりちゃんと聞いてなかったんだけど、今度はちゃんと聞くから詳しく話しをしてくれないか。よろしくたのみます…。

具体的な時間の予定がたったら、またメールするよ。それじゃあ、また……

雄太

第1回 反証主義の誕生（上）

生い立ち

慶介「いやあ、しばらく。元気でやってたかい？」

雄太「それじゃ、さっそくポパーについて話してくれないか」

慶介「なんだい、もうはじめるのか。やけにせっかちだね」

雄太「メールにも書いたけど、最近ある雑誌でソロスの記事を読んでいたら、ポパーはソロスの先生だったって書いてあったんだ」

慶介「たしかにそうだね。ジョージ・ソロスがロンドン・スクール・オブ・エコノミクスっていう大学で学んでいたときに、そこで教えていたポパーの思想に感銘を受けて、一時は哲学者になろうと思ったこともあったらしいよ」

雄太「なるほど……。じつはポパーの名前はまえから知っていて気になってたんだよ。以前にサッチャーの自伝を読んでいたときにポパーの名前が出てきたし……。ドイツの大統領だったワイツゼッカーの回想録にもポパーが出てくるって話を聞いたことがあるよ」

慶介「たしかに、現代の西ヨーロッパには、ポパーの思想に共鳴して賛同する政治家は少なくないね。それに政治家だけじゃないんだ。ノーベル賞級の科学者のなかにも、ポパーの思想に共鳴する人がいるんだよ」

雄太「へえー、そうなんだ。するとポパーはいろいろなところで影響を及ぼしているってことかな……。今日はソロスの記事がきっかけでポパーのことを知りたくなってやってきたんだけど、そういう話を聞いて、ますますいろんなことを知りたくなってきたよ。本腰を入れて聞くから、ポパーについて詳しく教えてくれないか……」

慶介「たしかにボクは、これまでポパーの本はいくつか読んできたけど、もちろんポパーのことはなんでも知ってるわけじゃない。だから、ポパーの思想をすべて説明するなんて、とてもできっこない。まあ、自分の考えや解釈をまじえてなら、一応どうにかポイントごとにまとめた説明ならできるかもしれないけど……」

雄太「それで十分。こっちだって、あんまり詰め込むことはできないよ。ただし、慶介も知ってのとおり、オレの哲学の知識はほとんどないようなもんだから、むずかしそうな専門用語でまくしたてるようなことは勘弁してくれよ」

慶介「わかった、専門用語で煙に巻くことはポパー自身がもっとも嫌ってたことだからね。できるだけわかりやすく話してみるよ。もし途中でわからないこと

があったら、いつでも聞いてくれ」

雄太「それを聞いて安心したよ。それじゃとりあえず、ポパーの生い立ちなんかから聞かせてくれないか……」

慶介「カール・ポパーは、一九〇二年七月二八日に当時のオーストリア・ハンガリー帝国の首都ウィーンで、ユダヤ人の法律家の長男として生まれた。姉が二人いたらしい」

雄太「ポパーもユダヤ系だったのか。いやー、ヨーロッパの知識人にはほんとうにユダヤ系の人が多いんだな」

慶介「そうだね、ポパーはアインシュタインを深く尊敬していたし、フロイトとかマルクスなんかを批判しているけど、彼らはみんなユダヤ系だったよね」

雄太「そういえば、ソロスもそうだったな……」

慶介「二〇世紀前半のヨーロッパでユダヤ人だったってことは、現在のボクたちには想像もつかないほど大変なことだったと思うよ。つまり、ナチスのことだよ。ナチスの犠牲になったユダヤ系知識人はたくさんいるけど、じつはポパーも危なかったんだよ。ポパーは自分がユダヤ人だったことについてはあまり語りたがらなかったらしいけど、やっぱりこうした境遇は彼の思想形成に大きな影響を及ぼしていると思うよ」

雄太「なるほど、そうだろうな」

慶介「ポパーが少年期や青年期を過ごしたころのヨーロッパは、雄太も知ってるように、世界大戦もあって激動の時代だったよね。とくにポパーの生まれ育ったオーストリア・ハンガリー帝国は、第一次大戦で負けた結果として中央ヨーロッパの弱小国に転落してしまった。そうしたなかで、ポパーは知り合いの影響もあって、だんだんとマルクス主義思想に傾いていくようになるんだよ」

雄太「ちょっと待った。慶介はさっき、ポパーはマルクスを批判してるっていったよね」

慶介「たしかにそういったけど、これから順を追って説明するから……」

雄太「わかりやすくお願いするよ」

ぞっとする体験

慶介「たしかに、ポパーはのちにマルクス主義に対する強力な批判者になったんだけど、でも労働者の窮状を救おうとしたマルクスの純粋な意識や正義感はずっと尊敬していたんだ。だから若いころのポパーは、最初は青年らしい正義感からやはりマルクス主義に引かれていったんだと思うよ。やはりポパーも多感な時期には、ふつうの青年とおんなじように、理想のユートピア社会なんかを追い求めてたんじゃないかな……」

雄太「なるほど、こういっちゃなんだけど、ポパーもけっこううぶなところがあったんだな」

慶介「そういういい方もあるかもしれないね。でも、第一次大戦が終わった直後の一九一九年に、ポパーはその後の人生を決定づけてしまうような二つの経験をする。そしてその体験を通して、自分のうぶさ加減を思い知らされることになるんだ。それでその結果としてマルクス主義と永遠にたもとを分かťことになる」

雄太「それって、どんな体験なんだ？」

慶介「もっとも、正確には体験っていうよりは出来事なんだけど、その出来事がポパーに重大なことを気づかせたっていう意味では貴重な体験だっていえるかもしれないな。その出来事のひとつは、ポパーの一七才の誕生日の少しまえに、ウィーンで起きた警官隊と共産主義者のデモ隊の衝突事件なんだ」

雄太「それにポパーは参加してたのか？」

慶介「いや、そうじゃないんだけど、衝突のときに警官隊が発砲して、デモ隊の方に死者がでたんだよ」

雄太「それって、どこの国でもよくある話だな。それで、ポパーは国家権力に対する敵愾心を強めたってわけか……」

慶介「いや、警察の暴力に対する恐怖心は覚えたらしいけど、ポパーはなによりも自分自身に対して恐怖を感じてぞっとしたらしい」

雄太「そりゃまたどうして？ ポパーはデモに参加していなかったんだろう……」

慶介「うん、たしかに参加していなかったけど、思想信条のうえでは、ポパーはデモ隊の参加者とおんなじ熱烈なマルクス主義信奉者だった。それでこのデモ

を引き起こして、流血の騒ぎを引き起こした責任の一端は、このマルクス主義思想にあったわけなんだよ」

雄太「そりゃたしかにそういえるかもしれないけどね……、でも実際に発砲したのは警察の方なんだろう。しかも、ポパーはいわば部外者だった。それなのに、どうして自分に恐怖を覚えなきゃならないんだ？」

マインド・コントロールのわな

慶介「そうだな。現代ふうのことばでいうと、ポパーは自分の心のなかにマインド・コントロールのわながあることに気がついて、しかもそのわなにみごとに落ちてしまった自分に気がついてぞっとしたってことかな……」

雄太「マインド・コントロールって、あのカルト教団の……。それがこの事件とどういう関係があるんだ？」

慶介「マルクス主義だけじゃなくって現代の新興宗教も、たいていは高邁な理想をかかげているよね。理想の社会、理想の楽園とかね。それで青少年なんかは心が純粋であればあるほどこうした理想に胸うたれ、これを信奉するようになるよね。まさに若いころのポパーも、マルクス主義がかかげる理想に胸うたれたからこそ、マルクス主義に共鳴したんだよ。けれど、こうした理想の信奉者たちはこれを実現すべく、さまざまな行動をとろうとする。デモなんかもそのひとつだよ。そして、そうした行動はたいてい危険をとまなう。犠牲者が出る。でも、その犠牲者にもかかわらず……っていうよりも、そうして犠牲者が出るからこそ、そういう理想を追い求める行動はますます過激になっていく」

雄太「尊い犠牲を無駄にするなってわけか……」

慶介「そうだね。知的に誠実で良心的な人ほど、ますますこういう傾向に拍車がかかる。たとえどんなものであっても、ある思想信条に自分の知的良心をささげてしまったとする。

するとそう簡単には節を曲げようとはしなくなるし、自分が信奉している信条は尊いものなんだって自分にいい聞かせて、たとえほかから強制されなくても、どんな犠牲も正当化しようとする。こうして、犠牲を重

ねれば重ねるほどますます強く信条を正当化するようになり、深みにはまっていく。ポパーはこのメカニズムを『損失を取り戻そうとしますますます損失を重ねていく』のに似てるっていつてるんだよ」

雄太「なるほど……。たしかに似てるよな」

慶介「結局、現代のカルト教団でのマインド・コントロールにもこういう心理的メカニズムがあるんだと思うよ。そりゃマインド・コントロールをかける側の人間がいることはたしかなんだけど、かけられる側の人間はたいてい純粋な人たちばかりだから、こういうわなを自分で自分にかけてはまっていくんじゃないかな」

雄太「いまいった『損失を取り戻そうとしますますます損失を重ねていく』ってことは、こういう場面にかぎったことじゃなくて、どこにでも見られることだよな。不祥事を隠すためにますます不祥事を重ねていくとかさ……。だいたい、日本が戦争の泥沼にどんどんはまっていつてしまったのも、ひとつには戦争でなくなった尊い犠牲を無駄にするなっていう呼びかけのためだったのかもしれないし……。それで思想信条は、戦争だろうが革命だろうがそういう行為のうしろめたさを払拭して、逆にこれを正当化してくれるってわけか」

慶介「そう、そしてポパーはこのわなに自分もはまっていることに気がついた。デモに参加したわけじゃなかったけれども、思想的にはデモの片棒をかついでいたっていう意識があったんだ。だから、自分もいつかはそういう過激な行動をとるかもしれないし、人にそうするように命令するかもしれないなんてことに気がついてぞっとしたってわけなんだ」

雄太「なるほど、そういうわけでポパーはマルクス主義から離れていったわけか」

慶介「でもこの事件をべつの角度から見ると、またべつのことがわかってくるんだよ。マルクス主義者たちは未来のユートピア社会を約束して、それは確実に到来するんだから犠牲を省みずにその実現に励めっていう。でも客観的に見て、ほんとうにそんな社会は到来するっていえるのかな？」

雄太「そういえば、共産主義の理想を目指してたソ

連なんかは、二〇世紀のうちに崩壊しちゃったしね……」

慶介「つまり、どうなるかわからない遠い将来の理想を実現するなんてことのために、いま現在の身近で貴重な生命や財産を犠牲にしまってはたしていいのだろうか、ポパーは疑問に思ったわけなんだよ」

雄太「なるほど、ただ単純に教義を信じ込んでしまっているやつにとってはいいかもしれないけど、世のなかそんなに単純じゃないよっていうことだな」

慶介「そうだね。そしてポパーは、こういうマインド・コントロールのわなに陥ってしまったのは、ひとつには、マルクス主義の思想信条を無批判に受け容れてしまったためだっていうことも悟った。この体験がのちになって、ポパーの開かれた社会の思想なんかに結実することになるんだけど、これについてはまたあとで話をしよう」

なんでも説明できる理論

雄太「ところで、さっき二つの体験っていつてたよね。もうひとつの体験って、どんな体験だったんだ？」

慶介「それは、たったいま説明したばかりの体験に比べるとあまり重要じゃないなんてポパー自身はいつているんだけど、でもポパーの科学思想を語るうえでは欠かせない決定的な体験なんだ。これには少なくとも三つの出来事がかかわっていて、ポパーはその三つから科学に対する洞察を引き出したっていうわけなんだよ」

雄太「それで、その三つの出来事っていつのは？」

慶介「ひとつは、いま話したマルクス主義者たちの態度。ポパーがいつには、彼らは日ごとに新聞を開けば、マルクス主義がいつかに正しい理論かがわかる証拠がどこにでも見つかるって豪語してたらしいんだ。つぎは、ポパーが一時働いていた児童相談所でのアドラーとのやりとり。そして三つ目は、この年一九一九年にアインシュタインの一般相対性理論の予測が観測によって確認されたっていう出来事だよ」

雄太「アドラーってだれだよ」

慶介「アドラーっていつのは、あの有名なフロイトの弟子筋にあたる人で、劣等感をキーコンセプトとし

て個人心理学っていう理論を唱えた精神分析学者だよ。ポパーが働いてたっていう児童相談所は、アドラーが設立したものらしい」

雄太「それで、ポパーはアドラーとどういう話をしたんだよ？」

慶介「まあ、これはポパー本人の口からしかいわれていないことだから、いろいろと脚色されているかもしれないけど……。ポパーがいうには、ある日、どう見てもアドラーの理論じゃ解釈できそうもないような患者の症例をアドラーに報告したんだって。そしたらアドラーはまだ患者も診てないのに、たちどころにその患者を診断しちゃったらしい」

雄太「すごいじゃないか。子供のころシャーロック・ホームズの探偵小説で、ホームズがワトソンから渡された腕時計からその持ち主の素性をたちどころに推理したっていう話を読んだことがあるけど、アドラーって、まるでホームズみたいじゃん」

慶介「そういう見方もあるかもしれない。けれど、ポパーはそうは考えなかった。ポパーはアドラーに対して、どうして診ないでわかるのかって聞いてみたんだ」

雄太「けっこう大胆だね、ポパーは。それでアドラーはなんて答えたんだい？」

慶介「アドラーは、『これまでそういう例を千回も経験しているからね』って答えたんだ」

雄太「アドラーは経験豊かな臨床医だったわけだね」

慶介「いや、やっぱりポパーはそうは考えないで、アドラーに対して、『けれども、これは千一回目の経験になると思うんですが……』っていったんだ」

雄太「皮肉なやつだね、ポパーっていう人は」

慶介「そうかもね。これはある意味ではアドラーに対するあてつけかもね。さっき雄太はアドラーはまるでシャーロック・ホームズみたいだっていったけど、ボクは違うと思うよ。この話のポイントはね、ポパーが報告した症例が、どう見てもアドラーの理論で解釈できそうになかったものだったってことだよ。つまりね、アドラーは自分の理論にとって都合のいい事例だけじゃなくて、都合の悪い事例もみんなおんなじように説明してしまったってわけなのさ」

雄太「たいしたもんじゃないか。アドラーの理論ってなんでも説明できるんだろう」

慶介「でも、なんでも説明できる理論って、ほんとうにたいしたものなのかな？」

雄太「そりゃどういう意味だ？」

説明と予測

慶介「つまりこういうことさ。説明を予測という観点から考えてみようか。なんでも説明できる理論って、はたしてなにかを予測できるんだろうか？」

雄太「なんで説明について考えるのに予測なんかが出てくるんだ？」

慶介「ここは重要なポイントだから、順を追って話をしよう。論理的に考えると、じつは説明と予測はほとんどおんなじだって考えることができるんだよ。つまり、すでに起こったこととか知られていることを理論から論理的に導き出すことが説明で、まだ起こっていないこととか知られていないことを理論から導き出すことが予測っていうことなんだ」

雄太「なんだかよくわかんないな……」

慶介「それじゃ、説明ってことをポパーがどういうふうに説明してるかを話そう。まず実験だ。ここに一本の糸がある。これをこうやってピンと張っておくから、そこのダンベルをこれにぶら下げてみてくれ」

雄太「こうかい。あつ、切れちゃった」

慶介「たしかに切れたね。どうしてこの糸は切れたのかな？」

雄太「そりゃダンベルをぶら下げたからだだろう」

慶介「それじゃ、この現象を説明することを考えてみよう。まず、『ある糸にその張力の限界を超える重さを加えると、いつでもその糸は切れる』っていう仮説がある。これは、ある特定の糸についていってるんじゃないくて、すべての糸について語っている。だから、こういう仮説は普遍文って呼ばれる。文っていうのは、専門的には言明とか命題っていわれるんだけど、こうしたことばは一般にあまりなじみがないから、ボクたちの話では文で通すことにするよ」

雄太「うん、わかったよ。普遍文の普遍ってのは、いつでもどこでも普遍的に成り立つってことを意味し

てるんだな」

慶介「そう。そういう意味じゃこれは法則っていえるし、いわば説明のときの理論に相当するんだ。ところで、さっき切れた糸の張力の限界は1キログラムだった。そして、これには2キロのダンベルがぶら下げられていたとする。なんで切れたのかな？」

雄太「そりゃ切れたのは、あたりまえじゃん」

慶介「そう、まさにそのあたりまえのことを導き出すのが説明なんだ。ところで、いま出てきたある特定の糸とダンベルについての文は単称文って呼ばれるんだけど、これは説明のときには初期条件とも呼ばれる。最初にこういう条件にしておいたってことだ。ここで、さっきいった普遍法則とこの初期条件を論理的に結びつけると、この糸は切れるっていう文が論理的に導き出せる。この論理的に導き出せるっていうことが、雄太がさっきいったあたりまえっていうことなんだよ。どんなことでも、理論と初期条件から論理的に導き出せれば、あたりまえのこととして説明できるっていうわけなんだよ」

雄太「なるほど。あたりまえのことだから、説明されると納得もするわけか……」

慶介「それじゃ、あそこにべつの糸があるけど、その張力の限界は3キログラムだ。この糸に5キロのダンベルをぶら下げるとどうなるかな？」

雄太「これも、当然切れるはずだよな」

慶介「そうだね。でもまだ雄太は、実際にあの糸にダンベルをぶら下げないよ……」

雄太「あっ、もしかしたら予測をしてしまったのかな？」

慶介「まさにそのとおり。そして今回も当然っていったのは、さっき説明のときにあたりまえっていったのとおんなじ考えからだよね」

雄太「なるほどなるほど……、説明と予測が論理的におんなじっていうのは、こういうわけだったのか……」

いつでも救える理論

慶介「だから、なんでも説明できる理論なんていうのは、そこからなんでも導き出せる理論ということに

なるよね」

雄太「とするとだよ……、そういう理論からは予測としてなんでも導き出せてしまうことになるな。っていうことは、なんでもありってことか……。あれっ、なんかおかしいな……」

慶介「いや、おかしくなんかないよ。つまり、極端な例でいえば、たとえば、ひとつの理論から明日雨が降ることも降らないことも同時に予測できてしまうってことだ。『明日は雨が降るか降らないかだ』なんていう予測は、はたして予測っていえるだろうか？」

雄太「たしかにこれじゃあ予測っていえないな……。実際に雨が降っても降らなくてもこれはあたったことになるんだから、予測どころか、なにもいってないんだな」

慶介「そうだよ。それじゃ、ここで話をアドラーに戻そう。ポパーにいわせれば、劣等感を中心としたアドラーの理論じゃ子供を溺れさせようとして水に投げ込む男の行動と、自分を犠牲にしてまでも溺れた子供を助けようとする男の行動のどちらも説明できるらしい。最初の男は劣等感のためにあえて犯罪でも犯せるんだってことを証明しようとして子供を突きとばす。二番目の男は劣等感をはらいのけるために自己犠牲でもできるってことを証明しようとして子供を助けようとする。こういうことになるわけだ。ポパーは、フロイトの理論もおんなじだっていってるんだ」

雄太「ひとつの理論でまったく正反対のことが説明できるってわけか……。これじゃ、ある男が子供が溺れているのを見てどうするか予測なんかできないよな……。でも、なんかまだひっかかるなあ。どこかの雑誌で、現代の物理学はすべてを説明できる究極の理論を目指しているって記事を読んだことがあるんだけど……」

慶介「それは大統一理論のことだね。なるほど物理学の理論なんかは、できるだけすくない原理でできるだけ広い範囲の現象を説明しようとするから、正反対に見えるようなこともおんなじ理論で説明することもある。たとえば、机の上のくぎに磁石を近づけてくぎが引きつけられる場合も、まったく引きつけられない場合もどちらも説明できるよね。でもこういう場合に

は、たいてい説明に使われる初期条件が違っている。つまり磁石の磁力とくぎと机のあいだの摩擦力が比較されて、くぎが引きつけられる場合は磁力の方が強くて、動かない場合は摩擦力の方が強かったって説明されるだろう」

雄太「なるほど。そうすると、事前に磁力と摩擦力をちゃんと測定しておけば、くぎが動くかどうかも予測できるってわけか……」

慶介「そういうことだよ。けれど、ポパーがほんとうに問題にしたことは、じつは予測ができないってことじゃないんだ。フロイトとかアドラーの理論じゃなくても、説明はできても予測はできない理論なんていっぱいある。さっきいった初期条件がうまく測定できなければ、結果はどうなるかわからないからね。かりに劣等感が測定できて数値で表わせたとなると、それがある値以上だったら犯罪を犯し、ある値以下だったら自己犠牲をするなんて予測ができるようになるかもしれない……」

雄太「そうすると、数値化できてないことが問題なのか？」

慶介「いや、そうでもない。ポパーが一番問題だと思ったことはね、たとえなにが起こっても、フロイトやアドラーの理論がいつでも救えてしまうってことなんだよ。なにが起きても理論は間違っていることにはならない。このことは、新聞を開くたびに自分たちの理論の証拠を見つけたっていうマルクス主義者にもあてはまる」

雄太「理論がいつでも救えることがどうしてそんなに問題なんだよ？」

慶介「それじゃ、またここでさっき話に出てきたカルト教団で話をしてみよう。靈感商法なんかやってるインチキ宗教の教祖は、たいてい『もっと神を信仰しなさい。そうすれば病は癒されるだろう』なんてことをいう。それでその教祖を信じている信者は信仰のあつさをお金で表わしたりする。でも病気は治らない。するとその教祖は『信心が足りないからだ』なんていって、もっと金を巻き上げようとする」

雄太「そういう許せないやつはたしかにいるね」

慶介「もちろん、実際に信者の病気が治ったら、恩

着せがましく神のお蔭だなんていうだろうよ。結局、病気が治っても治らなくても、教祖が間違っていることにはならないってなわけで、教祖の権威はいつでも守られてるわけだ」

雄太「だから、そういうインチキ宗教はいつまでたってもなくならないんだな」

慶介「ところで、教祖の教えはどうしていつでも守られているんだと思う？」

雄太「えっ、どうしてって……、それは……」

慶介「それはね、信者の病気が治るかどうかについてなにもいってないからなんだよ」

雄太「そうか、病気が治っても治らなくても間違ったことにはならないんだったら、それについてなにもいってないってことなんだな。しかしそれにしても、あの有名なフロイトの精神分析学がインチキ宗教とおんなじだなんて、ポパーはいいすぎじゃないか」

慶介「もちろん、おんなじだなんていってない。ポパーはのちに弟子のバートリーに指摘されて、フロイト理論については少々いいすぎたことを認めている。もともとポパーは、フロイトの理論そのものは高く評価していたからさ。ポパーが批判しているのは、むしろ都合の悪いことを無視しているようにみえるフロイト一派の態度の方なんだ。都合の悪いことに目を閉じて無視しつづけていれば、せっかくのフロイト理論がインチキ理論に陥ってしまうかもしれない。ポパーは、その可能性を放っておけなかったんだと思うよ」

雄太「すると、ポパーのフロイト批判はきつい忠告ってわけか……」

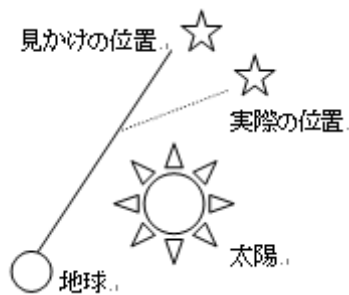
アインシュタインの態度

慶介「そういうことになるだろうね。ところで、これまで悪い見本の話ばかりしてきたけど、これだけじゃポパーは決定的な体験はできなかっただろうな。ポパーはアドラーやマルクス主義者の態度のほかに、理論に対するこれとはまったく異なる態度も同時に知ることになったんだよ」

雄太「それは、さっきいったアインシュタインのことだな……」

慶介「そうだよ。アインシュタインは一九一五年に

一般相対性理論っていう物理学理論を発表した。それによるとね、光も重力で曲がるんだって……。そこで、ほんとうにそんなことが起こるのかどうか確認するために、一九一九年にイギリスのエディントンっていう人が日食のとき太陽のそばに見える星の位置を観測しようとしたんだ。もし光が太陽の重力で曲げられているとすると、その星の見かけの位置は実際の位置よりも太陽から離れているだろうからね。もっとも、ふつうは太陽の光でそういう星はまったく見えないから、日食の日が選ばれたってわけだよ」



雄太「それで慶介がさっきいったみたいに、アインシュタインの予測は確認されたんだな」

慶介「そうなんだ。このことで、アインシュタインは一躍世界的な英雄になったんだ。でもね、ポパーがアインシュタインについて感動したのは、じつは彼の予測的中したことじゃないんだよ」

雄太「それじゃ、いったいなにに感動したんだよ？」

慶介「ポパーによれば、アインシュタインは、もし自分の理論がテストにパスしなかったら、それが支持できないことを認めたっていうんだ」

雄太「へえ、そりゃまた勇気のある発言だね」

慶介「もっとも、当時のアインシュタインはポパーがいうほどいさぎよかったかどうかあとで問題になったんだけど、いずれにしても、ポパーがアインシュタインの態度をそのようにいさぎよいものだって考えて、さっき話したようなアドラーやマルクス主義者たちの態度とはまったく違うんだって考えて、この違いに強く印象を受けたことはたしからしい。それは、自分の理論を後生大事に守りつづけようとする態度と、進んで危険にさらそうとする態度の違いってことなんだ

よ」

雄太「自分の理論を進んで危険にさらす態度ねえ……」

慶介「ところで、一般相対性理論から予測された星の見かけの位置の測定結果が予測値とは異なっていたとする。するとこの場合、理論は反証されたとか、反駁されたっていうんだ」

雄太「その理論が否定されたってことだな」

慶介「厳密にはちょっと違うけど、まあそういうことだね。つまりアインシュタインは、もし自分の理論がテストにパスしなかったらそれは支持できないって認めたことで、進んで自分の理論が反証される可能性を認めたことになる。これに対して、なにが起こっても、予測とはまったく正反対のことが起こってもいつでも理論が救えるとしたら、その理論は反証される可能性がぜんぜんないことになる」

雄太「なるほど、そういうことになるのか……」

科学と科学じゃないもの

慶介「ここまできて、やっとポパーにとっての中心的な考え方にまでたどりついたことになるんだよ。ポパーは、この反証の可能性っていうことが、ある理論が科学的かどうかを見分ける規準になるって考えたんだ。だから、アインシュタインの理論は科学的な理論で、フロイトやアドラーの理論、マルクス主義の理論は科学的じゃないことになる」

雄太「おいおい、なんでいきなり科学的かどうかなんてことが出てくるんだい。わからないわけでもないけど……、ちょっと説明してくれよ」

慶介「わかった。でも、いまわからないわけでもないっていったのは、たぶん、科学的だってことがひとつのステータスだってことをいったんだろう」

雄太「まあ、そういうことだけど……。環境問題とかいろんな問題で最近は科学に対する風あたりが強くなってきたけど、それでもいまの世のなかじゃ、たとえばどんなにかがわしい理論でも、科学的に証明されたとか科学的に裏づけられたなんていわれると、たちまち後光がさしてくるようになるからね」

慶介「たしかにそうだよ。このことは、ポパーが

これまで説明してきたような体験をした一九一九年でもおんなじだったんだ。科学的だっていうだけで、みんな信じてくれるようになったからね。だから、だれもが一生懸命事実や証拠を集めて、科学的に証明されたっていいがったわけだよ。ところがポパーは、科学的ってことは事実や証拠によって証明されるってことじゃなくて、逆に事実で反証されること、つまり、間違ってる可能性があることだって考えたわけなんだよ」

雄太「へえー、それって、ずいぶんと変わった考え方だね」

テストは反証か証拠集めか

慶介「たしかに、これは常識からずれた考え方かもしれない……。でもこれだけじゃない。科学的ってことが反証の可能性があることだとすると、科学で日夜さかんにおこなわれている実験のテストも、理論を証明しようとしてるんじゃないくて、じつは理論を反証したり反駁したりしようとしてるんだってポパーは解釈したんだよ」

雄太「テストが理論を反証しようとしてるって？ ほんとうにそうかな？ オレなんかは、なにかすごいことを考えついてそれをテストしようってことになったら、その考えの正しさが示せるような証拠を探そうとするけどね」

慶介「まあ、ふつうの人はたいていそう考えるだろうよ。でもね、ポパーは理論の正しさを示すような証拠を見つけるのはそれほどむずかしいことじゃないっていうんだ」

雄太「えっ！ そいつは聞き捨てならないぞ。証拠を見つけるのが簡単なら、科学者はだれも苦労しないんじゃないか」

慶介「まあ、ちょっと待ってくれよ。正確にいうと、証拠を見つけるのがむずかしくないっていうよりも、証拠が簡単に見つけられるような理論とか、あるいはもっというと、事実で反証されない理論をつくるのはむずかしくないってことなんだ」

雄太「それってどういうこと？」

慶介「はやく話、たとえば、さっきあげた『明日は

雨が降るか降らないかのどっちかだ』っていうことは、明日なにが起こっても反証されない。逆に、反証されないっていう意味では、なにが起こっても証拠になるという張ることもできる。もっとも、ここまで極端じゃなくっても、たとえば『明日は雨が降るか雪が降るか曇りになるかだ』ってことは『明日は雨が降る』とか『明日の朝八時から正午まで東京で一〇ミリ以上の雨が降る』っていうことよりも反証される可能性が小さいよね」

雄太「なるほど、できるだけ危険をおかさないで、しかもあいまいないい方をしておけば、簡単に反証されないような理論はつくれるってことか……」

慶介「そう、できるだけ危険をおかさないってことは、できるだけなにもいわないってことなんだよ。逆にいうと、『雨が降るか降らないか』なんてくだらないことじゃなくて、なにか中身のあることをいおうとすればするほど、それだけその発言は反証の危険性にさらされるってわけだ。だから、そういう実のある理論であればあるほど、テストして反証される可能性はますます高くなる。そして、アインシュタインの一般相対性理論ほどのレベルの予測になると、そりゃもう起こりうることは反証ばっかりってことになる。なにしろ、アインシュタインが計算した位置以外に星が見つかることは、みんな反証なんだから」

雄太「すると、中身のある理論であればあるほど、そのテストの結果が反証になる可能性はますます高くなるから、テストっていうのは反証になりやすいってわけか……」

慶介「もちろん、たんなるデタラメをいってそれが反証されてもなんの意味もないよね。だから、反証される可能性がとて高い理論をつくってそれをテストして、それでも反証されないで残るってことは、ほんとうに大変なことなんだよ。だから、科学者はそういう理論を目指して日夜苦労してるってわけさ」

雄太「すると科学者は証拠集めに苦労してるんじゃないくて、できるだけ反証されるようできて、それでも実際に反証されないような理論をつくるために努力しているのか……。変わった考えだけど、なんとなくいってることがわかってきたぞ」

慶介「そうかい、それじゃわかってきたついでに聞いてみるよ。中身のある理論ほど反証される可能性が高いのはなんでなんだろう？」

雄太「なんでって、そりゃいままで慶介が説明してきたことじゃないか。えーと……、それでなんでだったっけ？」

出来事を禁止する理論

慶介「それはね、中身のある理論っていうのは、いろんなことを禁止しているからなんだよ」

雄太「禁止って、あれやるな、これやるな、なんていう禁止のことか」

慶介「そう、その禁止だよ。でも人に対する禁止と違って、自然現象なんかにはあれは起こるなんていってもはじまらないから、厳密に言えば比喩的ないい方なんだけど……。さっき予測の話をしたよね」

雄太「ええと、どういう話だったっけ……」

慶介「なんでも説明できる理論から導き出せる予測っていうのは、なんでもありになってしまうっていう話だよ」

雄太「ああ、思い出した」

慶介「だから、ちゃんとした予測っていうのは、こういうことがいつどこで起こるってことを正確にいい表わしていなければいけないんだ。アインシュタインが、この時刻のこの位置に星が見えるはずだって予測したようにね」

雄太「そうだった、そうだった」

慶介「ってことは、そういう予測は、この時刻のこの位置に星が見えないことはないとか、この星がこの日にこの場所以外に見えることはありえないっていつているのとおんなじことになるんだ。これがさっきいった禁止ってことの意味だよ」

雄太「ははあ。すると『明日には雨が降るか降らないか』なんて、じつはなにも禁止してないってわけだな……」

慶介「まさにそのとおり。むかし、『わたしの理論でなんでも説明してみせましょう』なんて豪語した哲学者がいたけど、なんでも説明できてしまう理論なんていうのは、じつはなにも禁止してない理論だから、実

質的にはなにも説明してないに等しいんだ」

雄太「なるほどねえ……。なんでも説明するは、なにも説明してないのか……」

学生時代から

慶介「ポパーはこれまで話してきたような一七才のときの体験を通して、科学的な理論と科学的じゃない理論のあいだに線を引ける境界設定規準としての反証の可能性っていうことに思いたったわけなんだ」

雄太「そんなこと考えてるなんて、なんだかすごい一七才だよな」

慶介「まあ、それはともかくとして、ただ、ポパーはこれをあくまで個人的な問題として考えていたらしくて、公表するつもりはなかったらしい。それからそのあと二〇才になって、ポパーはウィーン大学に非正規の学生として入学し、哲学、数学、物理学、心理学なんかを勉強したんだよ」

雄太「えらく興味関心の幅が広いね」

慶介「そうだね。のちのおそるべき博識、博学の思想家ポパーの芽がこのころ芽生えていたっていえるかもしれないよ。そして、そのあといろんな仕事を経験した。さっき話したアドラーの児童相談所での仕事もそのひとつだよ。それから、二六才で博士号の学位をとった。そして、中等学校の教師の資格を獲得して、それから一、二年たってようやく中等学校の教師になったんだ」

雄太「あれっ、大学の先生になったんじゃないの？」

慶介「当時は第一次大戦後の混乱期で、いろいろと就職難だったらしいよ」

雄太「それでポパーは学校の先生になったってわけか……」

慶介「そう。現代の日本でいえば高校の先生ってとこかな。でもこのころ、生涯の伴侶となるジョセフィーヌ・ヘンガーって人と結婚している。もっとも子供はいなかったけど」

雄太「まあ、大学の先生ならともかく、所帯ももって高校の先生だったらけっこう大変だよな。それで、ポパーは哲学の研究をつづけられたのか？」

慶介「それについては、当時のウィーンで興りはじ

めていた新しい哲学的運動についての話をしないわけにはいかないな……」

雄太「新しい哲学的運動って？」
〈次回へつづく〉

<<翻訳>>

D.ミラー

『批判的合理主義:再定式と擁護』

第二章(1)

小河原 誠訳

帰納の問題に対するポパーの解決

2.1 反論の枚举

反証主義はしばしば反論にさらされてきた。科学的知識の成長の仕方について成功裡に説明しようとするならば、反証主義はその意図するところとは反対に、帰納についての何らかの原理あるいは規則を採用する必要があるというのがその根拠であった。それらの反論は、本章でそのすべてについて返答することになるだろうが、大まかに言って、9つのパターンに集約されるであろう。私は最初にそれらを枚举し、第二にそれらを除去するつもりである。パターン a から d は疑いもなく、より根本的なものである。しかし、すでにお気づきだと思うが、大多数の反-反証主義の望みは、実践上の闘いの場である g にかかっている。

a. 科学の諸前提

最初の、そしておそらくもっとも根本的な反論はつ

¹ David Miller, *Critical Rationalism: A Restatement and Defence*, Open Court, 1994, Chapter 2: Popper's Solution of the Problem of Induction. All right reserved by David Miller.

翻訳権: 小河原 誠。参考文献については原本の文献一覧を見られたい。

ぎのような主張のなかに見出される。つまり、科学、それどころか科学以前の探究でさえ、世界には秩序や規則性があるはずだという何らかの前提とか仮定をたてることなしには開始できないという主張である。この反論はすでに『探究の論理』第 79 節で考慮され取り除かれていたのだが、ときどきぶり返してくる。たとえばオヒアーは次のように書いている(1980, 57f and 60f)

帰納なしでやっていこうというポパーの試みは成功していない。帰納的推理は、絵の一部から切り離されても、別のところでまた浮かび上がってくる……そうになってしまう根源的な理由は、経験を整合性のあるかたちで概念的に捉えようとすると、世界には安定した秩序があるという前提が必要になるからである。…

帰納の合理性は……外部の、客観的世界への信念の合理性と同種のものである。

ファイヤーアーベントも同じような反論を口にして
いる(1978, 161f)。

推測と反駁の方法をもちこめば、帰納主義の……
難点を克服できるというわけではないのだ。……どんな事情のもとでもうまく機能し……またたくさんの準備などしなくとも機能し始めるような単一の方法といったものは存在しない。たとえば、推測と反駁の方法を取り上げてみよう。それは、勝手気ままな攪乱があちこちで生じることはないという世界でのみ成果を生むにすぎない。(そうでないとしたら、法則といったものは

それが定式化された瞬間に反駁されているだろうし、科学というものも決して生じえないだろう)。……帰納主義に対する反論というものはどんな方法論に対しても提起できる。ひとたび、この点を認めたなら、哲学とか論理のみでは問題を解けないことがわかるはずだ。断固として特定の方法を用い、それがどこに通じるのかを見きわめて初めて、問題を解くことができる。

同じ調子でトラステッドは「秩序を期待するという観念そのものが経験からの帰納的一般化を志向しているのだ」と述べている(Trusted 1979, 63)。

b. 科学の内容

次のもっとも根本的な反論は、世界についてのわれわれの知識は何であれ直接的(観察的)か推論されたかであるという前提にたつ反論である。もう少し詳しく述べてみよう。もし観察されなかったことについて何かを知っているとしたら、その知られたものはなんらかの推論過程を経て獲得されたものに違いない、というのがこの反論の眼目ののだ。例を挙げてみよう。サーモンはこう書いた(Salmon 1968, 26-28)。

もし科学というものが、われわれの観察を記述する言明、および、それをさまざまに述べ直したものの単なる集積以上のものであるとするならば、科学は、観察と演繹以外にもいくつかの別な方法を自らのうちに担っていなければならない。ポパーは、観察と演繹のほかに付加されるべき要素として、検証(corroboration)を提供した……

思うに、検証は証明的ではない種類の推論である。それは、仮説の内容が基礎言明の内容をはるかに超えていたとしても仮説を受け容れさせようとするひとつのやり方である。検証がなかったら後件否定式(modus tollens)は空虚であり、そして検証のある後件否定式と言ったら帰納のことなのだ。

サーモンはこの批判を繰り返したが(Salmon 1978, 11f)、いまでは撤回する用意があるようだ

(1981, 119)。同じような反論はグッド(Good 1975, 61; 1983, 163f)やオヒヤー(O'Hear 1975; 1980, 45f)もおこなった。彼らは普遍的仮説の使用は何であれ、明らかに、帰納的であると示唆している。

c. 経験的基礎

最近流行するようになった主張は、テスト言明を真とか偽として分類するにあたってさえ、帰納の規則は必要である、すなわち、基礎言明を受け容れることも不可避免的に帰納の1ステップである、というものである。たとえば、ヒューブナーは次のように書いた(Hübner 1978, 280)。

しかし、われわれはこう答えよう。どんな反証にも前提がある。たとえば、一定の観察理論の公理がそうした前提だ、と。さて、それらの前提が推測的であるならば……反証もまた推測的である。その推測はまったく任意であっていいのだから、反証は實際上意味を失うこともあるだろう。あるいは、科学者は自らの推測に対して論拠をいくつかもっていることもあるだろうが、しかし、この場合には、彼は帰納の使用を避けるわけにはいかない。

ニュートン-スミスも同じように「ポパー的な科学モデルの内部において仮説を偽であると示す際の究極の論拠」は何かと問い、そして正しくも論拠というものはないと結論し、つづけて「帰納がなかったら、基礎づけられた反証はありえない」のだから「ポパーにとって理論を拒否することは……群衆心理の問題[だ]」と主張した(Newton-Smith 1980, 152 および 1981, 64)。さらに最近では、ワトキンズは「レベル 1の言明[つまり、基礎言明]の合理的受容がありうることを示す……という問題……への解答は……ポパーによっては提供されなかった」と主張し、みずから非-帰納的な解答を提供する試みをおこなった。

d. テストの反復可能性

第四の反論はテストの反復と反復可能性にかかわ

っている。このジャンルでの古典的な反論は、エアのそれである(Ayer 1956, 74)。

しかし、[反証主義が]科学の方法についての正しい説明であるとしたところで、反証主義によって帰納の問題が除去されるわけではない。というのも、仮説を確証(confirm)するのでないとしたら、仮説をテストする意味はいったいどこにあるのか。テストに失敗した仮説はなぜ放棄されるべきなのか。——失敗したのだからその仮説は信頼できないということがないとしたら、つまり、ひとたびテストに失敗したなら再び失敗するであろうという仮定が立てられるのでないとしたら、なぜ放棄されるべきなのかがわからないではないか。仮説はすでに反証されてしまっているのに、普遍的に妥当なのだ、と主張したら、それは矛盾というものだろう。しかし、仮説はすでに反証されてしまっているのに、[帰納原理が仮定されていないならば]将来においては十分に成立するかもしれないと主張したとしても矛盾はないであろう。反証はもっとも健康な仮説でさえ雇っておかないといけないう種の幼児期の病気と言えるかもしれない。ひとたび雇ってしまえば、もう一度かかる機会はずっと少なくなることだろう。

エアが、この「仮説を確証(confirm)するのでないとしたら、仮説をテストする意味はいったいどこにあるのか」という修辭的な問いに対して反証主義は答えられないのであり、そしてこの問いは(十分に繰り返されて問われるならば)、反証主義を反駁するに十分であると考えていたのは明らかだ。というのも、彼は後のいくつかの箇所での問いをほとんど同じ言葉づかいで繰り返したのだから(Ayer 1972, 74; 1973, 158; 1982, 134)。同じ調子でヘッセは次のように書いた(Hesse 1974, 95)。

再度言うが、一般化に対する過去のひとつの反証は、この一般化が**将来**の事例においても偽であることを含意しているわけではない。この一般化は同じような状況下では反証されるだろうと仮定するとしたら、

それは帰納を仮定することなのだ。そしてこの仮定がなかったら、反証された一般化は何であれ信頼しつづけてはならないとする理由もなくなる。

これとまさに同じ論点は、ワーノック(Warnock1960)、レヴィソン(Levison 1974, 328-330)、トラステッド(Trusted 1979, 63f)およびオヒアー(O'Hear 1980, 63)によって指摘された。シュレジンガーは、次のように書くとき(Schlesinger 1988, 168f)、さらに歩を進めている。

科学者は帰納に依拠することなしには、ただの一步も進めない。科学者は、じっさい、未来は過去に類似するだろうという原理、つまり、自然の斉一性の原理、あるいは手みじかに言って、帰納の原理になんら妨げられることなくコミットしているのだ。彼のコミットはあまりにも包括的なので、仮説を反証しようとする時でさえ、この原理が妥当であることへの確固たる確信を基礎にして、そうするのである。……

したがって、明らかなことながら、科学者は、ここでそしていま偽であると観察されたことは何であれ、あらゆるところにおいて、あらゆる時に偽であると、つまり、世界は場所が変わっても変化しないと信頼してもよいという**まったくもって信頼できない**仮定をたてているのでなければ、何らかの理論を反証したなどと[自ら]信じることはできないであろう。

e. 収獲遞減の法則

第五の反論もテストの反復可能性にかかわっているのだが、焦点は限定されていてテストのきびしさにあてられている。すでに強調しておいたのだが、ポパーは、提案された仮説は偽であったならばどんなものでも反証されるだろうという望みのもとに、考えられるかぎりもっとも難しいテストに服させるべきである、と要求する。大雑把に言って、テストは、テストしようとしている仮説をもちこめばあることが起こるだろうと大いに期待できるのに、背景知のみではまったくと言っていいほどそれを期待できないとき、きびしいものである。つまり、その仮説はいわば常識とは根底的に

異なるということだ。ポパーは次のように書いた (Popper 1963, 390f)。

まじめな経験的テストというものはいつでも反駁、つまり反例を見つけ出そうとする試みから成っている。反例を探すにあたっては、背景的知識を用いざるをえない。というのも、われわれは最初にもっとも危険な予測を反駁しようと試みるからである。……さて理論がそのような数多くのテストに耐えるならば、テストの成果は背景的知識に合体されることになって、しばらくした後は、(われわれの新たな背景的知識に照らしてみると) 反例が……生起すると期待しうところは存在しないことになろう。ところで、これは、われわれのテストのきびしさの度合が下がったということを意味する。こうした理由から、しばしば繰り返されるテストはもはや意義があるとかきびしいとは見なされなくなる。反復されるテストからの収穫逡減の法則のようなものが存在する。

きびしいテストについてのこうした見解に反論して、ヘッセは次のように書いた (前掲箇所)。

ポパーの見解に対しては、何らかの帰納的仮定を設けずには語ることさえ不可能だという理由から、反論を提起することができよう。たとえば、「きびしいテスト」という観念がそうした仮定を免れているかどうかは明らかではない。それは、「過去において多数の一般化をひっくり返してきたのと同じ種類のテスト」、したがって未来においてもその一般化の弱点を見つけ出しそうなテストということなのだろうか。あるいは、「過去の経験にもとづけば、この特定の一般化は反駁されるはずだと期待させるテスト」のことを言っているのだろうか。いずれの場合においても帰納に訴えているのはたしかである。

帰納に依拠しない収穫逡減の法則が存在するという主張に反論して、オヒアーは次のように書いた (前掲書)。

ところが、反-帰納主義者の立場からしたら、理論がいくつかの機会にある種のタイプのテストを生き延びたからといって、この種のタイプのテストを受けた最初の機会にもまして $n+1$ 番目の機会にも、また同じタイプのテストを生き延びると考える理由を与えてくれないことになる……

テストのきびしさを決定するにあたっては、背景的知識が、どう解釈されるにせよ、帰納的に使われているように思われる。

マスグレーブもよく似た反論を口にしてきた (Musgrave 1975, 250f)。グリュンバウム (Grünbaum 1976a, 236f) やワトキンス (Watkins 1978, 356-360) は彼の批判を裏書きしているが、二人ともマスグレーブの解決を受け入れているとは思われない。私もまた、次の節で説明するように、受け入れるわけにはいかない。

f. グッドマンのパラドックス

私の念頭にある第六の反論は、ポパーの理論は、どんな帰納的理論にも劣らず、グッドマンのパラドックス (グッドマンは、これを Goodman 1955, p. 74 以下で、ある時点までなじみのない述語「グルー」という観点をを用いて述べた) が提起した問題によって困難に巻き込まれるという主張である。たとえば、ヴィンセントは、ひとつの言明がいかにして第三の言明の存在のもとでもうひとつの言明を検証 (あるいは確証) するのかという点についてのポパーの理論にかんする議論を要約した後で、次のように書いた (Vincent 1962, 162f)。

すでに述べたことからこう結論してもよいであろう。ポパー [の理論] によれば……「a はグリーンである」は、「a はエメラルドであり、そして a は時刻 t 以前に調べられた」との関連のもとで「すべてのエメラルドはグルーである」を確証する。……実際、「a はグリーンである」は「時刻 t 以前に調べられたすべてのエメラルドはグリーンである」と、「a はエメラルドであり、そして a は t 以前に調べられた」に相関する他の何らかの論

理的に偶然的な仮説との連言を確認すると結論してよい。私は、こうした結果が満足のいかないものであることは明白であると思う。

換言すれば、ポパーの理論によっては、多くの衝突し合う仮説が正確に同じ証拠によって同等に検証されてしまうことだろう。カイバーク (Kyburg) は、「ヴィンセントはポパーの基準が、ほかのすべての人のものと同じように、グッドマンの暗礁に乗り上げてしまったことを示した」と判断している (Kyburg 1970, 158)。バートリーの指摘したように (Bartley 1981, 347f)、多くの著述家たちがこの評価に同意しているように見える。最近の例はウォラル (Worrall 1989b) である。彼の論文の第二節は次のようなひとつの修辭的疑問に要約できる。「何らかのさらなる証拠に先立って、グルーマがいの仮説を防止するどんな理由をポペリアンは与えることができるのか」(273)。

この批判は、たしかに、ポパーのテストと検証の理論はその意図に反して帰納主義的であると直接的に告発しているわけではない。たしかに、この批判は、反証主義はつまるところ自然の斉一性の原理に依拠せざるをえないとは言っていない。(そうすることは、苦痛の徴候とその治療とを混同することであろう)。しかし、そこには次のような形をとった告発がある。すなわち、健全な予測と不健全な予測——つまり、健全な帰納推理と不健全な帰納推理——とを区別しないかぎり、グッドマンの問題、つまり、グッドマンの新たな帰納問題に対する解決とはなりえない。

g. 帰納のプラグマティックな問題

すでに言及しておいたが、批判者たちが帰納の原理は必要だと見ていた第七の分野がある。それは実践の文脈であった。この批判は、非常に古くからあり、事実、ファイグル (Feigl 1974/1981, 14f) が述べているように、ほとんど反証主義そのものと同じくらい古くからある。

カール・ポパーは、ヒュームの議論から深い印象を

受けて、帰納の正当化にむけての努力をいっさい放棄した。彼は知識の成長において、まさに帰納が生じていることではないが、帰納の重要性を否定した。しかし、私は、おそらくこのポパーの見解に対する最初の批判者として、なぜわれわれは法則に、つまり、きびしいテストにもかかわらず、これまでのところ反駁されてこなかった仮説や理論に信頼をおく(あるいは「賭金をはる」)のかと問うた。この問いに対して、ポパーは決して満足のいく答えを与えてこなかった……研究をさらにすすめるための、あるいは理論を実際に適用するさいの期待と行動のガイドとして、十分に確認された理論をわれわれは使っているわけだが、この一般に受け容れられた実践をよしとする理由を彼はまったく提出していない。

この批判は、いろいろなかたちをとっているが、依然として存在する。たとえば、コーヘンは次のように書いた (Cohen 1978a)。

もし科学的探究の目的が自然というものに対する力をわれわれに与えるにあるならば、われわれは、ある科学的仮説に依拠する際、それが証拠によってどの程度正当化されるものなのかを評価せずにはすまされない。われわれが新しい種類の飛行機に乗るとか、新種の医薬品を使おうとしたら、それが理屈に適って安全であることを証明する適切なテスト結果を欲することになる。

その少し後では次のように述べられている (1978b)。

ポパー主義者はもちろん論敵の誤解や混同を責める。しかしここでのディレンマは、単純であって、誤解の余地などない。つまり、ポパー的科学は、首尾一貫して反-帰納主義的であり、したがって技術が適用されていくときの推理とは切り離されているか、それとも、証拠による支援という基準を採用して、その反-帰納主義を犠牲にするか、という二つに一つしかないのである……

『探究の論理』はこのディレンマの最初の角〔選択肢〕によって串刺しにされている。

さらにこうも述べられている (Cohen 1980a, 492)。

しかし、ポパーはこのようにしてヒュームの敷いた道を他の誰よりも遠くまで下っていったのであるが、彼の哲学は……悪名高いことながら、純粹科学というまったく役に立たないもののための処方箋であった。それは、**技術**がもって然るべき納得のいく合理性を描きだすことができない。つまり、特定の場における物理的諸力や物体の動きを予測するにあたっては信頼のできる科学的仮説を……選択しなければならないのだが、その時における納得のいく合理性を描きだすことができないのだ。飛行機は地上での材料試験を生き延びたもっとも大胆な推測にもとづいて製造されるだろう。もし、あなたがその初めての搭乗者になろうというならば、その大胆な推測によってカバーされるはずの極端な条件がその試験で検討されていなかったなら、むしろ急ぎすぎというものだ。その推測は、相対的に高いポパーの検証をもつであろうが、証拠は不十分なかたちでしか支持していないであろう。そうした推測を受け容れる理由はむしろ乏しい。

「問題は」、サーモン (Salmon 1981, 121) によれば、「科学的アプローチは……他の方法よりも、予測についての、つまり実際上の行動目的にとつての合理的な基礎を提供するかどうか」ということである。(彼が他の方法ということで挙げているのは占星術や数霊術である)。ニーニルートやトゥオメラは問題を次のように要約していた (Ilka Niiniluoto, Raimo Tuomera, 1973, 203)

ポパーが答えそこなっている根本的な問題はこうである。もっともよくテストされた理論を基礎にして自分の実際上の決断を行うことが**合理的**であるのはどうしてか——しかもそれが成功する選択であると期待する**何らのよい理由もない**ときに。

同じ様な批判を口にしているのは、ラカトシュ (Lakatos 1968, 390 - 405)、ホーソンとウォラル (Howson and Worall 1974, 368)、パットナム (Putnam 1974 / 1981, 第二節)、ジェフリー (Jeffrey 1975, 111)、オヒアー (O'Hear 1980, 36 - 42) および他の多数の者たちである。

この議論の線は、明らかに、帰納法を好む者にとっても、嫌う者にとっても、明らかに魅力がある。たとえば、ワトキンズは、信頼性が必要であると主張して、帰納の実践的問題に対する自分自身の非-帰納的な解決という入り組んだ議論を開始し、以前に主張していた立場を次のように素描している (Watkins 1984, 337f)。

行為者が、自分の行動をガイドしてくれる仮説に望むのは、理論家が評価するような深さとか統合性といった特性ではなく、**信頼性**であろう。……しかし……もっともよく(あるいは十二分に)検証された理論とか仮説にもとづいて行為者が行為する理由は、もしあるとして、どのようなものであるのだろうか。……検証度の評価は、将来の振る舞いについて何も語らない。……[しかし他のことがらが同じであるとすれば]……決定をおこなう者は、つまるところもっとよく検証された仮説に頼ることになろう。頼るべき手段は他にないのだから。ポパーは科学の成果以上に頼るべき**よりよいものは何もない**と示唆した。

まさに引用しておいたサーモンの論評および「ヒュームの懐疑派に対して……こうした方法のどれにせよ、他の何らかの方法より、優れているとか劣っていると証明することはできない」(*loc. cit.*)というサーモンの主張を肯定的に引用することで、ほとんどただちにワトキンズは「勝負だ、サーモンに向かい合って事を決しよう」(341)と宣言しつつも、敗北を認めてしまっているのである。これでは実際、ピュロニズムの勝利というものだ。サーモンの公然たる正当化主義と帰納主義から印象を受けたもう一人はウォラルである。彼は哀調に満ちた調子で、ガリレオの法則とは落下して跳ね返ったボールが投下地点の高い建物を飛び

超えることはないということだと考えている人びとに、次のように問いかける。

「ミラー」やポパーはしばしばこう強調してきた。つまり、これまでに明確化されてきた普遍的理論のすべてが……偽であることが明らかになるかもしれない……ガリレオの法則が正確に次の瞬間に反証されることはないだろうと考える理由はない、と。では、正確に言って、このアドバイス……つまり、あたかも、ガリレオの法則が次の瞬間に反証されるようなことは起こらないだろうというように行為せよというアドバイス……——このアドバイスが、正確に言って「帰納への訴えを含んで」いないとどうして言えるのか。

（彼のアイデアは対話のかたちで述べられているので）明快なわけではないが、ウォラルの結論（Worall 271f）は、合理主義者は、よりましなものをもっていないので、次のような独断的主張に至らざるをえなくなる、ということだろう。

「もっともよく検証された一般化を……未来の行動のためのガイドとすることが合理的である」という原則……もし、過去と未来とのあいだの演繹論理上のあからさまなギャップに橋をかけようとするならば……ある種の実質上帰納的な原理を合理的理論の一部としなければならない。

こうした類のことは、私には、まったくの誤り、懷疑主義者や非合理主義者の手に落ちることであるように思われる。次節においては、反証主義なら、帰納主義者が演じるマジックにわずかりとも譲歩することなく、合理的な行為が可能である次第を自然にかつ容易に説明できることを示すつもりである。

h. 方法論と真理への接近

ここで報告しておくべき最後の二つのタイプの批判は、真理の探究としての科学ではなく、端的に真理接近度（verisimilitude）の探究としての科学にかかわっている。最初の批判は、ラカトシュが、自ら

の学説を梃入れしようとした際に依拠したものである。それは、先にも言及しておいたが、実践上のことがらに関するかぎり反証主義は帰納によって癒しがたい程に毒されているということであった。（ラカトシュの立場についての手短な要約はザハール Zahar1982/1983, 167に見られる）。その批判は、純粋に理論的関心においてさえ、ポパーの方法論は帰納原理を必要とするというものであった。ラカトシュ（1974/1978, 156-59）は次のように書いた。すなわち、真理接近度についてのポパーの理論は、

はじめて、一連の偽なる理論に対してさえ**進歩**を定義することを可能にした……しかし、これでは十分ではない。われわれは進歩を**認知**しなければならない。それは帰納原理によって簡単になしとげられる……この原理は、「科学というゲーム」のルールを……**われわれの科学理論のもつ真理接近度の増大のしるし……**についての——推測的な——理論として再解釈する……

ポパーによる方法論的評価が興味深いのは、主として、そうした評価にしたがって生きるならば、他の仕方によるよりも、真理なるものに近づくよりよいチャンスがあるという隠れた**帰納の仮定**の故である……

ポパーは……彼の科学ゲームにおいて肯定的評価がなされるならば、それは、推測的知識の成長の——推測的な——あかしと見なされてよいと、つまり、検証は真理接近度についての——推測的であるにもかかわらず——**総合的な手段**であると言うとき、依然として曖昧さを拭い去ることはできない。

付随する注（*op. cit.*, 165）で、ラカトシュはこの「帰納原理」を選ぶとしたら、

大雑把に言って、科学的リサーチ・プログラムの方法論の方が、他のどんな方法論よりも、現実の宇宙における真理に近づくためにより適合的であるから

であると書いている。

彼はこうした原理が「悲しいかな、反駁不可能であ

る」ことを認めた。したがって、彼を慰めるには、それも、またそれと何かしら類似したものも科学の方法論は必要としていないと指摘してやることだろう。

i. 奇蹟による議論

考慮されるべき最後の反論は、わずかばかり技術的なものであり、簡単に明瞭化しうようなものではない。この反論のきっかけとなったのは、ポパーの次のような趣旨のいくつかの注釈による。「アインシュタインの理論のような理論が、その先行者によっては予測されていなかった非常に正確な測定を正しく予測しうとしたら、そこに『ある真理』が含まれていないかぎり、きわめてありそうもない偶然であろう」(Popper 1974b, 1192, note16 5b)。ポパーは、仮説が多くの真なる予測をするという事実をもって、それを真とすることはできないと注記している。(この点は、ヒューエル [Whewell 1847, 63] および ポアンカレ [Poincaré 1903/1952, 95; 1913/1963, 100f] によっても、明らかに、指摘されていた点である)。というのも、実際、ニュートンの理論とアインシュタインの理論はじつに多くの真なる予測を共有するが、相互に矛盾し合うのであり、したがって共に真ではありえないからである。しかしながら、彼は次のように示唆した(1972, 102)。

ありそうもない観察結果とのよい一致は、偶然でもなければ、理論が真なるためでもなく、ただ単にそれの**真理類似性(truthlikeness)**による。

この議論は……多くの両立しない理論が、まったくの偶然によって一致することは直観的にはきわめてありそうもないにもかかわらず、多くの微細な点で一致しうるのはなぜなのかを説明するであろう。

ポパー(1981)の 263 ページにも類似の言明が存在する。そこで真理類似性はただ比較的に語られているだけである。つまり、観察上のよい一致が示しているのは、当該の理論はその先行者よりも真理により接近しているということではない、と。ポパーはこの議論が「典型的に非帰納的であることを強調するの

だが、つづけて次のようにも譲歩する(1974b, 1192, note165b)。

ここには帰納主義の「一息」があるかもしれない。それは、漠然とした実在主義的仮定と一緒に、すなわち、実在は未知ではあるけれども、ある点では科学が告げるものに類似している、換言すれば、科学はより大きな真理接近度を目指して進歩しうという仮定と一緒に、入り込んでくる。

ポパーの注意にもかかわらず、この一連の注釈は、(科学的実在論の旗のもとに最近語られてきたことと多くを共有しているのだが)、一般に、ポパーをしてその哲学が避けようとしている帰納主義のナンセンスにコミットさせるものであると受けとめられてきた。たとえばオヒアーはこう書いている(O'Hear 1980, 67)。

何人かの注釈者たちがこの行文を、ポパーがその批判者たちに対してあまりにも大きく譲歩したものと見てきたのも驚くにはあたらない。たしかに、その「一息」とともに、ポパーの哲学は、常識に、そしてまた世界についてのわれわれの知識についてよく語られていることに、よりよく即応するようになるが、それはまた、ポパーが、あまり注意深くない読者によって検証とか理論のテストが帰納的含意をもつと見なされたことに對して、もはや苦情を言えないということでもある。

そしてニュートン・スミスは「ここには帰納主義の一息があるというのはまさに誤りであって、いっばいに膨らんだ暴風がある」と主張している(Newton-Smith 1981, 68)。後に見るように、これはまさに誤りである。

これをもって、ポパーの方法論的提案が帰納主義に染まっていると考えられてきた 9 つの仕方についての私の解明を閉じることにする。いまや、反証主義がこれら 9 つの告発の各々に対して力むことなく、しかし力強く、対処できる次第を示すことにしよう。

2.2 反論の除去

a. 科学の諸前提

最初の反論は、「科学の方法は、**自然の諸過程の不変性**を前提している」ということであつたが、注意しておいたように、これはすでに『探求の論理』において述べられており、片づけられていた。そこでポパーは、当該の原則は形而上学的なものであり、「……自然法則は、……空間と時間にかんして不変であるべきだという方法論的規則」をもってすれば、最良のかたちで置き換えることができる(1934/1959a, 253)、と論じていたのであつた。それは、方法的規則(rule of method)であつて、ポパーの主張では、帰納の規則のような推論規則からは容易に区別されるものである。わたくしには、この答えはその及ぶ範囲において正しいし、敷衍することもできると思う。問題の要点は、世界についての真正の興味深い知識を提供するためには、帰納主義が世界にはなんらかの規則性があると仮定する必要があるのに対し、反証主義は、世界にはなんらかの規則性があるべきだと命じるだけであつて——その種の仮定を設ける必要はないということである。

じっさい、帰納主義はもう少し多く——つまり、すべての、あるいは、ほとんどの規則性は真正の規則性であると——仮定しなければならないのだが、ポパーが観察したように、これは、明白すぎるくらい偽であるにもかかわらず、反証不可能なものとして扱われなければならないのだ。しかし、反証主義が(幸運とか、発明の才などなどから目を転じたとして)うまくやっていくに必要なものは、それよりもはるかに弱いものでいいのである。たとえば、「あらゆる自然的出来事はなんらかの自然法則のもとに包摂される」のは真であるといったことでいいのである。(もっとも、これは非決定論者にとってはあまりにも強すぎるものであろうが)。強調しておきたいが、こうしたカント主義的原則は、反証主義によって仮定されたり、前提されているわけではない、ということだ。そうした原則はあきらかに反証不可能であり、そして(ワトキンズ

1958 の用語で)形而上学的であり、(またおなじくワトキンズの用語で、全称-存在言明(all-and-some statement)である)。そして、じっさい、制約された形でのカント主義的原則は、われわれの蓄積された科学的知識からの一帰結、あるいは帰結同然のものと見なしていいのだ。第一章第二節の末尾にかけて指摘しておいたように、われわれの科学的諸理論には、変わることなく、反証不可能で形而上学的な帰結が存在している。

ところで、反証主義は自然の諸過程の不変性にかんしてどんな形而上学的仮定も設けないとはいえ、ポパーはそれに対応した方法論的規則、すなわち、空間的-時間的に普遍的な法則を探索せよという規則の採用を勧めている。とすると、その形而上学的原則が偽であつたなら、この方法論的規則のためにわれわれは取り返しのつかない誤りを犯すことになるはしないかと危ぶむむきがあるかもしれない。だが、ちょっと考えてみれば、そうではないことは明らかだ。あらゆる自然的出来事を法則のもとに包摂しようとどれほど試みても、絶えず失敗することだつてあるかもしれないわけだ。だから、ポパーの提案している規則をもちいたところで、それがなかったら真として分類してしまうような仮説を偽として分類してしまうことはないであろうし、それがなかったならば、偽として分類してしまうような仮説を真として分類してしまうこともないであろう。だが、ポパーの言っている規則は、それがなかったら思いつくこともなかったであろう仮説を思い浮かせてくれるかもしれない。これはたしかである。わたくしには、そんなことをしたら過失になるとか、いずれにしても真理の追求を妨げることになるなどと考えすることはできない。

しかし、なんらかの出来事が自然法則によって支配されていない可能性があるのみならず、それどころか、ファイヤーアーベントが示唆したように、無法則性が最高の支配権を握っているかもしれない(Sudbury 1973;1976 を見よ)。ここに、帰納主義にたいする反証主義の別種の利点が認められる。規則性が存在していないならば、推測と反駁の方法は(おそらく、規則性が存在していないという推測を別

にすれば)貧弱な成果しか生まないかもしれない。それに反して、帰納主義はいっそう悪いことになる。それは、偽の(そして、反証不可能な)仮定によって行き詰まってしまうであろう。あるいは、ライヘンバッハのようなアプローチの場合では(Salmon 1967 52-54)、超越論的議論は黙示録とみまちがうほどの誤りに達しておりしかもその残骸は除去しえなくなるだろう(Popper 1983, 339)。たしかに、大胆な推測ときびしいテストという方法もおおくの真なる理論的知識を産み出しえないかもしれない。じっさい、ポパーはこう述べている。「知識や規則性についての探求が失敗するような可能的な、また現実的な世界が数多く存在する」(1972, 23)。しかし、推測に制限を設けたりあるいはテストを手加減して、推測と反駁の方法をいじくりまわしたところで、そうした世界での知識の獲得がなにがしか簡単になるわけでもないだろう。反対に、思弁的で批判的なアプローチは、見出されるべき知識は存在しないという特殊な推測を試みることに勇気を与えるかもしれない。それは、偶然的現象の領域で普遍法則を探求しながら、それに絶えず失敗したことが機縁となって、ある種の領域では確率的法則こそ期待しうる最良の法則であると認識されるようになったことによく似たことかもしれない。この点でのファイヤーアーベント自身の示唆——方法の価値は「断固として特定の方法を用い、それがどこに通じるのかを見きわめて初めて、問題を解くことができる」という点にあるという示唆——は、推測と反駁の方法がそうだというのと同じくらい、わたくしには窮屈に響く。だが、論理が放棄されているなら、ファイヤーアーベントは放棄されねばならないと示唆しているわけだが、われわれは、方法が到達したところ(じっさい、どこかには到達しようと仮定しての話だが)を見ても、その方法の価値が何であるのかをほとんど決定できないであろう。じっさい、ここでファイヤーアーベントは「自分がまさにかすめ取ってしまった品物がないといって、自分が餌食にした者たちを責める泥棒のようにひびく」(Feyerabend 1981, 59)といっても言いすぎではない。必ず断固として方法を用いその到達するところを見よ、とは言うが、その到達するとこ

ろを見、見たものに注意を払うことは、文字通り、推測と反駁の方法なのだ。

上述で問題の要点と呼んでおいたもの——帰納主義が規則性を仮定せざるをえないのに対し、反証主義はただそれがあることを命じるだけでいい——は、なんんかの読者、とりわけウォラルを当惑させた。彼は、自分の人生にとって、「自分の理論が、世界に対して仮定を真とすべきことを要求するなら、仮定をたてずにいていったい何の利得があるのか」(1989b, Note 19, 294)がわからないと白状しているからである。いまや明らかであると思うのだが、反証主義は、宇宙の規則性についての何らかの仮定が真であることを要求する方法論的規則(あるいは「理論」)を、どんなものにせよ、うちに含むことはない。たしかに、推測と反駁の方法が成功するだろうと予測しようと思えば、規則性についてのなんらかの仮定が必要だと言われるかもしれない。しかし、反証主義者は成功するだろうという予測を試みることはない(Popper 1972, 23)。とりわけ、そうした仮定は、必要であったところで、いたましいまでに不十分であるからである。反証主義者はまた、方法論の一部として、大気は酸素を含んでいるなどと仮定することもない。かりに、知的生命についての現在の理論(これは間違っているかもしれない)によれば、方法としての反証主義の成功は「世界に対して仮定を真とすべきことを要求する」としたところで、そうなのである。

要約しておこう。科学は不変性とか自然の秩序にかんする形而上学的仮定を含む必要はない。科学は、明らかにテストされないような仮定を含む必要はない(もっとも、科学はテストされないような帰結を不可避免的に含むであろうが)。科学上の仮説は世界に対して秩序を提案する。だが、それを前提することはない。

b. 科学の内容

サーモン、グッド、そしてオヒアーを当事者として例に挙げることができるのだが、第二の反論は、なんんかの帰納推理の過程が存在しなければ、世界についての、われわれ自身の観察の内容を超え出た

知識を獲得することはできないというものであった。これに対する反証主義者の答えは、まったくもって単純である。われわれの知識の大部分、とりわけわれわれの理論的知識は、観察によっても推論によっても獲得されるのではなく、当て推量によって獲得されるということである。もちろん、ストーブ(1982)のように、当て推量によって獲得されたものを仰々しくも知識などとは呼ばないことにしようとすることもできる。しかし、そう決めてしまうと、やっかいなことが生じてしまう。大部分の科学的知識は知識ではなくなってしまうのだ。(以下の3.1節をみよ)。他方で、当て推量を推論の過程であると呼ぶ手もある。しかし、こうした呼び方をするならば、その推論はいかなるルールにも従っておらず、正当化の必要もないことを心に留めておかねばならない。さらに言うと、普遍的形式をとった当て推量は、前提から引き出されるわけでも、証拠に基礎をおいているわけでもない——そしてじっさい大部分の場合には、ふつうなら支えてくれると考えられるどんな証拠にも先立っている——のだが、にもかかわらず、そうした当て推量を帰納推理の結論と呼ぶ手もある。しかし、こうした言い方をするには何の意味もない。どんな言い方をしようとも、当て推量にたいしてはヒュームの問題はまったく生じてこない。科学上の仮説がたどる生涯を見れば、ヒュームの問題が生じてくるような場所はほかにはないからである。仮説は、ひとたび当て推量されたなら、追放されるまで、科学の体系のなかにとどまるからである。そして、[仮説の]追放、反証、代替の論理はとことん演繹的である。推測は、推論ではないし、また、反駁は帰納ではない。仮説を科学に入れ込むためにはどんな帰納推理も必要ない。仮説をそこにとどめておくためにはどんな帰納推理も必要ない。仮説を取り除くためにはどんな帰納推理も必要ない。

「ポパーの演繹主義は無垢なままにとどまるが、科学は予測の力をもたないことになる」(1978, 12)とサーモンが述べたとき、彼の前提は正しかったが、結論は誤っていた。ポパーが繰り返し強調してきたように(1974b, Section15;1972/1979, 363f)、科学には予測の力(あるいは、予測内容)がある。つまり、科学

を成り立たせている推測は、過去と未来の双方にかんして、普遍的であるとともに高度に情報に富むものである。しかし、だからといって、それらは帰納的に(あるいは他のなんらかの仕方)で推論されたのではない。サーモンがここで使っており、1981年の著作では落とした推論規則は、「もし[科学]が予測の力をもつなら、科学はなんらかの増幅的推論を統合していなければならない」(*op.cit.*, 13)ということだが、これは増幅的推論であり、ただしく帰結するものではなく、したがって妥当するものではない。もちろん、科学のおこなう予測は、証拠によって正当化されたり保証されたりするものではない。それらは信頼できる予測ではない。ヒュームが示したように、予測についてそうしたことはありえない。であるとしたら、なぜそうである必要があるのか。1.1節で強調しておいたように、さらに再度、以下のgと3.4節で強調するように、われわれの目的は真なる予測をすることにあるのであって、信頼できる予測をすることにあるのではない。増幅的推論ルールはなんらその種のことをなしえないという論証があり、それは争う余地のない(そして、思うに、議論の余地なく明白な)論証であるのに、どうしてそのようなルールを要求することが合理的であると考えられようか。わたくしには、まったく理解しがたい。

c. 経験的基礎

第三の反論は経験的基礎に関係していた。経験という基礎の上で、テスト言明を決定的に(conclusively)確立することはできないのだから、それを得るにはある種の帰納的理由づけが必要になる、というのが一般の考えである。結局のところ、もし、テスト言明が純粹に推測的であるならば、「たとえ、一瞬間ではあれ、科学の基礎をそうした推測においてどうして満足していただけるのか、ほとんどわからなくなる」(O'Hear 1980, 75)。そうになったら、どんな反駁でもほしいがままにできるようになるだろう——それは、「どんな恣意的な体系でも「経験科学」として樹立できる道を開くことである」と批判者たちは感じているのだ。

これは(オヒアーが承認しているように)、まったくもって、プロトコル言明についてのノイラートの自由奔放な学説に対して、ポパーが提出した反論であった。ノイラートの説では、「プロトコル言明は、不都合なものである場合には、『削除』してもいいことになっている」(Popper 1934/1959a, 97)。しかしながら、ポパー自身の提案に対する反論として見た場合には、それは根本的に間違っている。というのは、それは、受容されたテスト言明(基礎言明)に求められている役割を考慮しそこなっているからである。反証主義によれば、テスト言明は決定的反証のために、つまり、仮説を偽として確定するために用いられるのではなく、仮説を偽として分類するために用いられる。したがって、受け入れる——つまり、真として分類する——と決定されたテスト言明にかんしての大事な点とは、テスト言明は真であってほしいということである。したがって、テスト言明に対して的確に申し立てることのできるただ一つの苦情は、それが偽であるということである。ポパーが真理に言及することにあれほど神経質になっていなかったなら、彼は、1934/1959a の著作で間違いなく、この点を明確に語っていただろう。さて、テスト言明は間違って分類されたのではないかと疑う人ができたとしてみよう。その人が自分でその言明をテストし、その言明には偽の帰結があると示そうとするなら、大いに歓迎されるだろう。その人がそれをできない——テストできないというのではなく、反駁できない——のであれば、明らかにその人は、そのテスト言明が維持されてはならないとする理由、換言すれば、それがもはや真として分類されてはならないとする理由を挙げていないわけである。反駁は推測に基づいているのかもしれないが、だからといって、価値のないものになるわけでも、正しくないものになるわけでもない。

ワトキンズもまた、ノイラートのアプローチに対するポパー自身の批判を、つまり、それは経験主義を沈没させるという批判をポパーに投げ返そうとしている。しかし、すでに引いた他の著者たちとは違って、ワトキンズは、反証主義は帰納推理のルールを必要とするとは結論しておらず、ただ、ポパーはどうすればそ

れを採用せずにすむのかを示しそこなったと結論しているだけである。ワトキンズは、1984 の著作の 7. 2 節でつぎのような説を『探求の論理』に帰している。つまり、科学的理論をテストすることは、その理論が直面しているテスト言明を受け入れるという決定以上ではなく、したがって、それはまったく恣意的であり、よってどんな理論も適切なかたちでテストにさらされることはなくなる、という説である。ポパーによれば、テスト言明それ自体は、他のすでに受け入れられているテスト言明と照らし合わせることによってのみテストされる。ところが、このことは、ワトキンズによると、「[テストのテストという]導出の長い連鎖があるのみで、**テスト**はなされていず」(*op. cit.*, 253)、経験が視野から消失してしまうことだという。ここには、忘れられている点があるように思われる。経験はただテスト言明を受け入れるという決定を動機づけることができるだけで、それにとって代わることはできない(とって代わることができたら、心理学主義になってしまうであろう)のと同じように、テスト言明を受け入れるという決定も同じように経験によって動機づけられるだけであって、経験にとって代わることはできない(とって代わるができたら、規約主義になってしまうであろう)。ポパーが、「理論についてのあらゆるテストは、……われわれが**受け入れることを決定する**なんらかの基礎言明で停止せざるをえない」(1934/1959a, 104)と言うとき、決定を下すことがテストにとってのすべてであるなどと言っているのではない。それは、つぎのような引きつづく文からも明らかである。「なんらかの決定に達しないならば、つまり、あるなんらかの基礎言明を受け入れないならば、テストはどこにも到達しないであろう」。ポパーはテストなど存在しなくなってしまうであろうと言っているのではない。テストは存在しつづけるであろうが、(ことばの日常的な意味で)決定的ではなくなる、ということなのだ。観察や測定はなされつづけてきた。それらの意義は、生じたことを記述しているテスト言明にそくして決定されなければならない。ラリー・ブリスクマンは、ポパーの経験的基礎の理論をつぎのように、華麗に要約した。**飛ぶ前に見よ。**

受け入れたテスト言明が真であること、しかも、他のテスト言明とただ整合的であるというのではなく、また、ただたんに規約的に真であるというのでもなく、客観的に真であることを要求しても、そこにはなんの恣意的な要素も存在しない。そして、実験物理学のある領域においては、幸せなことにテスト言明を正確に分類するための明確に定められた手続きが存在しているし、またそう推測される。(生物学や、とりわけ心理学においては、これほど幸せな状況にいるわけではない)。こうした手続きのすべては、決定を下すという点に眼目があるし、またその限りで——他のすべての決定を下すことと同じように——なんらかの規約的要素を含んでいるのだが(*loc. cit.*, 108f)、こうした手続きのなにかに対して反対する者は、それらのどこがおかしいと考えているのかを言ってほしいものである。

d. テストの反復可能性

最初にこう言うっておかねばならない。仮説がテストを通過したという事実は、それ自身では、そのテストが反復されたときにもやはり通過するだろうと考える理由にはならない、と。仮説がテストに失敗しても、そのテストが反復されたときにやはり失敗するであろうと考える理由にはならない。しかし、失敗したということはその仮説が偽であるということを含んではいる。

ヘッセは先に引用した箇所で、「すべての A は C である」という一般化が反証されたならば、その一般化は類似のテストでも反証されるだろうという「帰納的仮定」がたてられないならば、つまり、「すべての未来の A が C であるわけではない」という帰納的仮定がたてられないならば、「すべての未来の A は C である」に依拠することを妨げるものはなくなってしまう、と述べている。ここには、ある種の不明瞭さがあるし、「帰納的仮定」という表現は一般に用いられているとはいえ、残念な表現ではある。というのは、結局のところ、帰納の熱烈な支持者はふつう帰納を推論の一過程と考えていて、仮定を立てる戦略と考えることはないからである。しかしながら、「すべての未来の A が C であるわけではない」という制約された一般化は、反証

されたなら「類似の状況でも反証されるであろう」ということをいっているわけだが、ヘッセはこれを推論の結論であると言うわけにはいかない。というのも、妥当な推論(演繹的推論、あるいは、こうしたものがあるとして帰納的推論)をただおこなうだけでは、合理的であったものをもはや合理的でないとすることはできないからだ。推論は、前提のうちにすでに暗黙のかたちで(演繹的に、あるいは、こうした様式があるとして、帰納的に)含まれているものを明示化するだけなのだ。したがって、女史に言えることは、「すべての未来の A が C であるわけではない」が仮定されねばならないということだけであるように見える。反証主義者は、この主張と争う必要はない。もっとも、この主張が理想的なかたちで表現されているなどとは思ってはいないが。じつのところを言えば、『探求の論理』の第 22 節ではつぎのように明確に述べられていた。理論が反証されるのは、「[それを]反駁する再現可能な効果が発見される時のみである」、つまり、「その効果を記述する低レベルの経験的仮説が提案され、検証されるとき」(Popper 1934/1959a, 86)のみである、と。反証仮説は統計的なものでしかないかもしれない。いずれにしても、それは、他のどんな仮説とも同じように、まさに推測でしかないものであり、そして推測にかんしては帰納的なものはなにもない。こうしたことについてはすべて b 項で論じておいた。それを繰り返す必要はないと思う。

「帰納的仮定」という句が言おうとしているのかもしれないもの、また時に言っているのは、自然の斉一性という形而上学的原理である。シュレージンジャーは、それを「帰納の原理」と呼び、(ただし)「まったくもって証明できないもの」(*loc. cit.*)と記している。しかし、そうしたアプリアリな原理にどんなメリットがあるにしたところで、a 項でそうしたことがらを論じたときには定式化されたものなどなにも見出されなかったし、反証をえるには、そうした巨大なこと[アプリアリな原理]は明らかに必要ないのである。シュレージンジャーは、別なふうに考えるかもしれない。しかし、「すべての A は C である」を反証するのに「すべての A は C ではない」を検証する(verify)必要はない。

結論を述べておこう。「仮説を確証するのではないとしたら、仮説をテストする意味はいったいどこにあるのか」というのは、しばしば繰り返されたエアの問いであるが、この問いのとんでもない不適切さに目が向けられねばならない。この問いに対する単純明快な応えは、結局のところ、[テストの要点は]仮説を反駁することにある、ということだ。エアが問うべきであった問いは、彼自身の問いから自然と促されてくる問いではあるが、あまりエレガントでない仕方では表現してみると、つぎのようになるかもしれない。「仮説を確証するためにテストするのであるというなら、その要点はいったいどこにあるのか」。もっと簡潔に表現してみると、「仮説を確証するする要点はなにか」。まったくおもしろいことに、この問いをたてたのはエアその人であった。彼は、以下の第7章で論じるように、証拠全体 (total evidence) というカルナップの要請 (1950, 211-13) を卓越した仕方では批判しているが、そのなかでこの問いをたてていた。私は未だかつて確証の価値についての満足のいく説明を見たことはない。上述の1. 1節で注意しておいたように、仮説が(検証ではなく)確証されているという事実は、仮説が真であるか偽であるかという問題となんのかかわりも持たない。あるいは、確証理論家がたいへん好む信念という言葉づかいで表現して見ればこうなるだろう。確証は、信念を以前よりもより価値のあるものとするかもしれないが、それを信じるべきかどうかは教えてはくれない。仮説の確証を求めることで、あるいは、現実には仮説を確証することで、どんな利得がえられるというのだろう。自状するが、まったくわからない。一般的な問題は、さらに3. 4節で論じ、より短くは第5章と6章で論じる。

e. 収穫逓減の法則

第五の反論はテストのきびしさにかかわっており、ふたつの側面をもっていた。ひとつは、帰納的活動が存在しないときも、なんらかのきびしいテストが存在するかどうかということである。(私は、ここでは、ヘッセが概念的なものとして提示していた問題を実質的な問題として再定式化するつもりである)。他方

は、きびしさは、テストが繰り返されるたびに、逓減していくのかということである。第一の論点に対する返答として、断固としてこう言っておかなければならない。前節でのポパー1963年からの引用が示していたように、テストのきびしさの評価がかかわってくるのは、背景的知識であって、過去の経験ではない。背景的知識は、決して以前のテスト報告に限定されることはないのであって、数多くの種類の一般化を含んでいる。d項で強調しておいたように、この点については少しも帰納的なものは存在しない。じっさい、背景的知識の大部分は、だいたいにおいて吟味しがたい偏見とか憶測といったものにきわめて近い。そして、背景的知識のいくつかの部分が不適切であることが時として発見されるが、それは仮説のきびしいテストを通じてのみである。たとえば、運動中の物体の長さはその速度に依存しないということは、おそらく、マイケルソン／モリーが実験をしていた時代には背景的知識の一部であった。この仮説は、以前には批判されたことがなかったし、たしかになんらかの種類の帰納推理によって得られたものでもなかったが、結局のところ、偽であることが承認されたのであった。帰納は、いかなる意味においても、きびしいテストが存在するための必要条件ではない。

テストのきびしさは、われわれの知識のある特権的な部分——たとえば、すでに十分にテストされた部分——に相関連するのではなく、直接的に論争されているわけではない知識すべてにかかわっている。帰納主義者にとって、これが満足のいかないものであることはよくわかる。彼は、仮説が失敗することに失敗するようきびしいテストからこそ何事かを学べると思っていたり、また、仮説の長所は、仮説の成功によって客観的に増大すると期待しているからである。というのも、きびしさが、背景的知識の気まぐれな偶然的な蓄積に依存しては困るからである。しかしながら、反証主義者にとってはまずいことはなにもない。きびしいテストを課すという要請は方法論的な要請にすぎないのであって、テストがひとたびなされてしまったなら、それがきびしかったかどうかはほんのわずかの関心もひかないからである。というのも、テスト

に通過しても、仮説にはなにも生じないからである。そして、失敗したなら、仮説はテストがきびしかったかどうかにかかわりなく、拒絶されるからである。ポパーがただしくも観察したように、仮説はテストされればされるほど、仮説が曝されるべき新しいテストを見つけることはますますむずかしくなる。したがって、われわれはきびしさの劣るテストに駆り立てられていく。「理論の経験的内容は、しばらくすると陳腐になるというのは、ポパーの理論のもつ魅力的な長所である。」(Boon 1979, 3)

ところで、オヒアーとマスグレーブによって提出された反論は、科学に対する反証主義的アプローチは「収穫逦減の法則」を説明できないということであった。この反論は、新しいテストの獲得可能性ではなく、すでにとりおこなわれたテストの反復にかかわっている。(Boon *op. cit.*, 2)。この反論は、最初に見たところでは、きわめてやっかいなものであるように見えるかもしれない。テストが以前に何度もなされたという事実は、なぜ、そのテストの反復をつまらないものにしてしまうのか。私の答えはこうである。テストを繰り返すポイントは、一定水準の再現可能な効果が発見されたということ(もちろん、確認することではなく)チェックすることでしかない。これは、探求中の仮説を現実に反駁するテストの場合を考えてみれば、明らかである。反対証拠の一種がえられたとき、われわれがもっとも知りたいのは、記録された効果は気まぐれ的なものではなかったのか、ということである。そうでないときには、適正な反証がえられたのであり、テストを繰り返したところで、獲得されるものはなにもない——結局、仮説が偽であることはすでに知られているのだから。正確に同じことは、仮説が合格するテストについても言える——テストの反復からは、テストが同じ結果をもって反復されうることしか学べない。

時には、テストを反復しても同じ結果を伴わない——最初の発見された効果は、じっさい、オカルト的である——かもしれない。さらにこれはもっと稀なことではあるが、反復可能な効果は、統計的なものであってさえ、近い将来には存在しないと結論せざるをえ

なくなるかもしれない。自然科学ではこうしたことは滅多に生じないが、それでも生じるということは、もちろん、自然科学が成功裡に進化をとげるにあたっての重要な要素である。つまり、「大部分の装置は、結局のところ、斉一的にふるまっている」ということが(もし、真であるならば)真であることが、自然科学の成功における重要な要素になる。さらには、このどちらかというルールな一般化を十分スマートなものにしてテスト可能にし、科学的仮説としての資格を与えることも可能であろう。(Worrall 1989b, 269 は、つぎのような言明を述べている。「[どのようなものであれ]受容されており、十分にかつ独立にチェックされている低レベルの観察的一般化は、圧倒的に確認された経験的一般化として存在し、のちに反証される[ようなことはない]」)。しかしながら、この言明を真であると仮定することを正当化するものはないし、ありえないであろう。それどころか、a 項で強調しておいたように、そう仮定する必要もないのだ。

自分の反論を取り扱うときのマスグレーブ自身のやり方は、こうである。すなわち、仮説が反駁される(あるいは、検証される)のは、彼が述べるところでは、「反証仮説……あるいは、検証仮説の保証済みの受容」のために、「十分にたくさんの回数」テストが反復された時のみである(Musgrave 1975, 251)。しかし、「ある実験的一般化を、その否定言明に抗して、受け容れることをときとして『十分にたくさんの回数の試行』のあとでは合理的であると宣言するとき、マスグレーブは、名前だけは異なるものの、帰納主義的テーゼを提案しているのだ」(Howson 1977, 145)。マスグレーブの説明は、「ポパーに対して『十分にしばしばとはどのくらいしばしばのことなのか』という問題を解決しないでいる」(1976a, 237)という根拠のない根拠で、グリュンバウムによっても攻撃された。しかし、わたくしを見るかぎり、再現可能な効果の予見は、ふつうには、テストが開始される以前における背景的知識の要素である。すでにおこなわれたなんらかのテストが数回繰り返されるのは、仮説の実質をさらにテストしようとするためではなく、記録された効果が反復可能なものであることをたんにチェックするためである。

こう述べたからといって虚勢を張っているわけではない。この点は、たぶん、背景的知識がなんら反復可能性を示唆していない場合を考えれば、よくわかるであろう。そうした場合は簡単に手にいるわけではないが、つぎのような場合を考えてみよう。一束の校正刷りにはまったくミスがないという仮説をテストしている場合である。校正刷りというものを知っている人は、〔何度も作り直される〕校正刷がみんな同じであるとか、統計的効果のようなものがたくさんあるだろうとは思わないであろう。じっさい、ミスプリが初めて見つかるまで、作り直された新しい校正刷りはすべて、第1校と同じように、実際のところ、〔ミスはないという〕仮説のまったくきびしいテストであろう。だから、収穫逓減といったものは存在しないであろう。(しかしながら、キューパースは、「斉一的な結果を期待するよい理由

がないテスト」の場合では収穫逓減の法則をえるために、帰納を引き合いに出す必要のないことを示した。Kuipers 1983, 210を見よ)。ここにおいても、典型的な場合においても、同じテストが何度も繰り返されたあとで、普遍仮説の受容にかんするなんらかの問題が生じてくるのではない。最初のテスト結果を繰り返すことができるという主張(この主張をなしたとして)が拒否されなければならないかもしれない。そして、そうでないときには、なにも起こらないし、なにも起こらないのだから、テストをやめても、なにかしら重大なことをしてしまったということにはなりえない。それではたまらないという人は、まったく好きなだけそのテストをやり続けられればいい。

+++++

<<新刊紹介>>

ポパーがコンサーヴァティブになった次第

Phil Parvin, *Karl Popper*, Major Conservative and Libertarian Thinkers Series, vol. 14, New York & London: Continuum, 2010.

小河原誠

この著に副題をつけたらどうなるかと考えた結果が標記のタイトルだが、このタイトルはほんのわずかばかりトリッキイである。そもそもポパーは政治思想家としては——少なくとも 60 年代前半ころまでの一つの有力な読み方のもとにおいては——ソーシャル・デモクラットであったのではないか。それがなぜにコンサーヴァティブになってしまったのか。ソーシャル・デモクラットという概念と、平等を否定し伝統の名のもとにエリート主義を語るコンサーヴァティブの概念は真っ向から衝突するのではないのか。著者のフィル・パーヴィンの知的枠組みが狂っているのか、それともポ

パーはどこかで内密の思想的転向でもしてしまったのか。パーヴィンの答えは簡明である。時代の変化がポパーをコンサーヴァティブに押しやってしまったというのだ。そして、この点を描くことに本書の最大のメリットがあるように思われる。だが、その点に立ち入る前に、本文 150 ページほどの本書の内容を型どおり紹介しておこう。目次をみると本書は次のような構成になっている。

第1章 知的生涯

初期の発端

教育研究所

ワイトゲンシュタインとウィーン学団

「戦いの書」

後期の年月

第2章 ポパーのアイデア

ポパーの認識論

科学から社会科学へ

社会科学から政治へ

開かれた社会とその敵

第3章 ポパー哲学の受容と影響

ポパー、バーク、そして理性の可謬性
ラディカルな政治、ラディカルな哲学
ポパーと新右翼の登場
イデオロギーについての結語
第4章 ポパー哲学の現代的意義
結論

1章と2章については簡単なコメントで済ませたい。

第1章は、主としてハコーヘンの著作によりながら、ポパーの生涯のおおよそをたどっている。今までに知られていなかった新しい事実が提示されているわけではない。しかし、叙述は簡明であり、手際が良いと言えると思う。

第2章は、ポパーの認識論(科学哲学)——評者自身は「方法論」という言葉を使用した方がよいと考えるが、ここでは著者の言葉遣いに従う——を紹介している。この部分の叙述も簡明であり、通常の研究書にみられる型どおりの紹介の仕方——科学哲学から政治哲学への移行という枠組みでの紹介——を超えるものではない。もちろん、ポパーはウィーン学団と対立した反証主義者であり、形而上学の有意味性を承認した人物として描かれている。特色があると言えば、ヒストリズムに対するポパーの分析と批判にかなりのページを割いている点であろう。これはパーヴィンが、ポパーによるマルクス主義批判を語るために必要としたということであろう。しかし、ひとつ気になった点がある。パーヴィンはたしかに反証主義としてのポパーの認識論を紹介しているが、ポパー哲学における非正当化主義の意義を理解していないように思われるという点である。じっさい、非正当化主義という言葉は一度も登場していないし、この考え方についての叙述もない。評者は、それが現代のもろもろの政治哲学との関連のなかでポパーの政治哲学(批判的合理主義)を評価しようとするパーヴィンの試みの価値を大きく引き下げているのではないかと危惧する者である。

さて、第3章と第4章が本書の眼目である。ここでの基本的論旨は、本稿の冒頭でも示唆しておいたよ

うに、ポパーの政治哲学が時代の流れのなかでコンサーヴァティブな哲学と見なされるに至り、そしてさらにマージナルな哲学として理解の外におかれたということである。第3章から順序を追ってパーヴィンの議論の大筋を紹介していきたい。

パーヴィンはまず、ポパーの『開かれた社会とその敵』がリベラル、コンサーヴァティブ、リバタリアン、ソーシャリスト、ソーシャル・デモクラットに至るまで20世紀の思想に幅広く影響を与えたことを確認し、そしてそのこと自体が、ただちにポパーは何者であったのか、という問いを投げかけると言う。これは、もちろん『開かれた社会とその敵』がもった、そしていまなおもつ影響力の根源は何であったのかという問いでもある。パーヴィンは、それをポパーの「反イデオロギー主義(anti-ideologism)」に求めている。パーヴィンはこの聞きなれない言葉で、ポパーによるあらゆる政治的イデオロギーへの批判を概括する。もちろん、この時には伝統の観念に対するポパーのシンパシーが見落とされているわけではない(p. 105)。

他方でパーヴィンは、『開かれた社会とその敵』自体のイデオロギー性を随所で指摘するのみならず、学問的に見た場合における種々の問題点——言うまでもなく、プラトンやヘーゲル解釈の問題性、マンハイム理解の不十分性、「全体主義」概念の非歴史性——を遠慮なく指弾している。(これは昔から指摘されてきた点であるが、評者自身はポパーの流儀——論敵をもっとも強力に描いたあとで批判する——の帰結であると考えている)。『開かれた社会とその敵』自体は、全体主義との「戦いの書(fighting book)」であり、イデオロギーの書物であった。

さて、そうすると、「反イデオロギー主義(anti-ideologism)」と「戦いの書(fighting book)」であることとはどう調停されるのであろうか。パーヴィンは、それをポパーの認識論的考察——知識の成長に関する批判的合理主義——に求める。そして、それこそがポパーにおけるコンサーヴァティズムとして捉えられている。だが、その点に立ち入る前に、パーヴィンのコンサーヴァティズム理解をおさえておかなければならないだろう。彼は次のように述べてい

る。

「コンサーヴァティズムは、さまざまな装いをとってきたが、往々にして、少なくとも部分的にはイデオロギーの拒否ということで特徴づけられると考えられてきた。その擁護者はしばしば、コンサーヴァティズムを規範的内容を伴った一連の原則としてよりも、社会と政治的権威を理解するためのひとつの**アプローチ**と見てきた。コンサーヴァティブは、全体としてみれば、特定のそして理想的な未来を定義する諸原則に訴えるよりは、現存する諸伝統、諸制度、諸価値に蓄えられ蓄積されてきた知恵に訴えることによって、社会的諸問題を同定し対処することにより関心を払うプラグマティストとして自らを定義してきた。」(p. 105。強調は著者自身のもの。)

コンサーヴァティズムが一つのアプローチであるというのであれば、ポパーの批判的合理主義はおそらくはもっとも包括的なアプローチになるであろう。なぜなら、それは知の成長を促す「批判」を中心的概念として——つまり、方法として——可謬性を強調し、それに対処しようとする立場であるからである。こうした意味での「批判」が一つのアプローチとして理解されるのであれば、それは知識の哲学にもとづく政治哲学批判ということになるであろうから、「反イデオロギー主義(anti-ideologism)」というラベリングも必ずしも不当ではないだろう。また、可謬主義がコンサーヴァティズムにおける「理性の限界」の強調と同根のものであることもたやすく理解できる。しかし、このような議論の仕方はあまりにも形式的、表面的すぎるのではないか。認識論上の類似性だけで、コンサーヴァティブのレッテルを貼ることができるのだろうか。

パーヴィンは、こうした問いに対して、コンサーヴァティズムの実態をバークに即して捉えることで答えようとする。パーヴィンによれば、1970年代末また1980年代初めまでコンサーヴァティズムは、バークの仕事と結び付けられてきたという。パーヴィンにとって、バークはラディカリズムを拒否し、漸進主義を擁護する人物であった。そして、このような要素がポ

パーのうちにあることは言うまでもなく明白である。しかし、フランス革命を拒否し啓蒙の理念を拒否したバークは社会が階級的に構造化されていることを承認しエリート(貴族)の支配を擁護していたのではないか。としたら、バークとポパーの差はあまりにも大きいと思わざるをえない。ポパーがコンサーヴァティブとレッテルを貼られる理由はもっと深く追求されねばならないだろう。

パーヴィンによると、第二次大戦後、コンサーヴァティズムは広い意味を持つようになり、バークと関連のない思想家をも含むようになったという。彼は、コンサーヴァティズムの意味変容は、コンサーヴァティズムへの批判者によって惹き起こされ、それがポパーにも及んだと考えている。

パーヴィンの議論はこうなる。左翼は、ポパーにおける個人主義へのコミットおよび市場経済志向をエスタブリッシュメントの見解であって、自由主義的資本主義のイデオロギー的支配に挑戦する意思のないものと解釈した。『開かれた社会とその敵』は社会民主主義を強力に語っていたにもかかわらず、ポパーは、バーリンやアロンと一緒にされ、冷戦期リベラルとレッテルを貼られた。これは、60年代、70年代における左翼急進派の台頭によってポパーが時代遅れと見なされたという議論(むしろ、指摘というべきか)だろう。

「ポパーはリベラリズム、漸進主義、ラディカルな計画の不毛性主張を持続的に擁護したのだが、それは、アカデミーの内外における多くの人間がラディカルな変革のうえに約束された「進歩的」集団主義的政治に走っている時期においては、ポパーをコンサーヴァティブの陣営に追いやるものであった。」(p. 111)

ここでパーヴィンは、当時の急進派(市民権運動や女性の権利キャンペーンなど)の主張を整理している。それは「リベラル」に対する批判として、おおよそ以下のように整理できるものであろう。

伝統的なリベラルな民主主義的・政治的・諸制度

は、マイノリティよりも多数派を優先している。つまり、リベラルは口に平等を唱えても、現実にはレスビアン、黒人、移民などが体系的に多数派によって虐げられている現実を傍観している。これは、現状 (status quo) 肯定の反動家の論理にすぎない。社会を変革していくには、討論といった啓蒙主義的原則よりも共有されている文化、人種、エスニシティ、ジェンダーに依拠した集団主義 (collectivism) に基づくべきである。

パーヴィンは、だいたいこのような枠組みのもとで当時の急進主義を描くのだが、評者は大筋においてはあたっているだろうと考える。したがって、こうした運動の側から見れば、ポパーはまさしくコンサーヴァティブに見えたことになる。ポパーの批判者たちは、ポパー哲学がマイノリティを排除していること、民主的討論が意思決定過程から切り離され宙に浮いていることを見落としたとして批判したというわけだ。ポパー哲学はエリート支配、コンサーヴァティズムへの青写真のための議論だと見なされたということだろう。

他方でパーヴィンの見るところ、こうした過程を通じて、左翼はますます批判理論やフーコーの影響下に陥った。左翼からすれば、ポパーはマルクスのユニバーサリズムを個人の自由を説くリベラルなユニバーサリズム (理性の普遍性) で置換しただけに過ぎないことになる。ポスト・モダニズム、ポスト構造主義、批判理論は、ポパー的試み (啓蒙のプロジェクト) を近代のメタ・ナレイティブ (大きな物語) に基づくものとして拒否したとされる。それはもはや維持できないのであり、啓蒙の概念や理想や価値に訴えることは意味を失ったというのである。パーヴィンの見るところ、批判理論 (ハーバーマス) を初めとする左翼の諸理論は、ポパーの哲学を資本主義下の権力と抑圧——左翼はこれを規範や言語の抑圧的性格にもみている——の問題に対して無力と見なしていたということだ。

左翼からの批判に対するポパーの応答は、左翼急進主義における全体論的傾向、また理性の限界を指摘することであり、個人主義と民主主義的対話

にますますコミットすることであった、とパーヴィンは考える。つまり、パーヴィンの考えでは、ポパーの応答とは、リベラル民主主義を最良のものとすること、部族主義に陥らせないものとしての批判的合理主義を顕彰すること、またそれを実体的価値とすることであった、ということになる。パーヴィンの考えでは、ポパーは、批判理論やポスト構造主義には相対主義があると考えていたのであり、また、明晰性の欠如を指摘した、とされる。(断っておきたいが、評者はパーヴィンによる急進派に対する比較的高い評価には同調できない点がいくつかあるが、ここでは触れない。)

パーヴィンは、左翼急進主義の台頭のなかでポパーの政治哲学がコンサーヴァティズムの方向にますます押しやられる一方で、いわゆる新右翼の登場によって、1970 年代後半、1980 年代前半にかけてコンサーヴァティズムの意味はさらに移動した、と考える。ここでのパーヴィンの議論は、コンサーヴァティズムの敵がなんであったかという点に焦点を結んでいる。

パーヴィンによると、リベラルやコンサーヴァティブにとっての敵は、全体主義やラディカリズムまたカウンターカルチャーのみならず、集団主義であったとされる。リベラルやコンサーヴァティブは、集団主義の源を社民的コンセンサスに見たのであり、国家が富の再配分や福祉国家の建設にリベラリズムよりもますます強く乗り出してきたことに対して警戒感を強めたというのである。それは、リベラルやコンサーヴァティブにとっては、個人主義よりも連帯を求める動きであったのであり、労働組合の力を強め、国家が (連帯に向けて) 社会の計画的改造に乗り出す動きであった。パーヴィンははっきりとは書いていないと思うが、これはかつての「リベラル」が社会民主主義によって克服されたことへの反動でもあったのだろう。パーヴィンの見るところ、リベラルは、フリーマーケットや個人主義にコミットし、コンサーヴァティブはプラグマティズム、伝統、反ラディカリズムにコミットしていた。結果として、リベラルもコンサーヴァティブも集団主義とラディカルな社会改革に不安を抱いたとされる。彼らの不安は

1970年代後半に頂点に達し、新右翼として手を結んだとされる。彼らの標語は、プラグマティズム、政治に限界を設けること、個人主義、お節介な国家からの個人の解放といったことであり、そして彼らはハイエクに向かった、とパーヴィンは理解している。

ここで、パーヴィンは、当然のことながら、ポパーとハイエクの共通点に目を向ける。パーヴィンの見るところ、彼らはともに、個人の自由、独裁制の拒否、理性の限界についての自覚(人はすべてを知っているわけではないし、知ることもできない)、ラディカルな変革の拒否などを共有し、また思想的にはバークと結びついているとされる。

しかし、パーヴィンは不一致点にも目を向ける。両者はリベラリズムが何を含意するか、という点では不一致であったとされる。特に国家による干渉の規模については一致しなかったという。たしかに、ポパーはレセ・フェールをきびしく批判していた。ポパーは、ハイエクとフリードマンが擁護したような無制約の経済システム、無干渉主義を拒否した。ポパーは、国家干渉は個人の自由を守るためになされるべきだと考えた。これに対してハイエクは、認識論的不確実性はどんな社会改革の試みをも妥当でないものにしてしまうと論じ、異議を唱えたとされる。

パーヴィンは、ポパーとハイエクの間の共通点と相違点を睨みながら、ポパーの社会民主主義は1945年から1970年代にかけてヨーロッパで支配的であった社民的コンセンサスを擁護するものであったのだが、リバタリアン、リベラル、コンサーヴァティブを自称する者たちによってそのコンセンサスを破壊するために使用された、と見ている。その際の武器は、ポパーとハイエクに由来する・理性の限界論(可謬主義)と方法論的個人主義による集団主義批判であったということなのだろう。つまり、ポパーの認識論(社会科学方法論)が新右翼登場の背景を準備したのであり、集団主義と闘うための哲学的背景を構成したということになる。

第5章では、ポパー哲学の現代的意義が考察されている。

パーヴィンは、グローバリゼーション、移民、資本主

義市場の拡大、ネーション・ステイトの衰退(IMF、世界銀行、EUなどの帰結)にもかかわらず、依然として宗教的ファナティズム、権威主義そしてナショナリズムが蔓延している世界政治のなかで、ポパーによる閉じた社会の部族主義批判には大きな重要性があると指摘している。この点は、アングロ・アメリカ圏の政治理論家たちによって無視されてきたように思われるだけに、評者も強調されてよい点であると思う。

また、ポパーの政治哲学は、民主主義の伝統のないところに民主主義的価値をもちこむことへの批判を含んでいる、とパーヴィンは考えている。イラクやアフガニスタンの例は、その証左になるということなのだろう。

現代世界の**政治状況のなかで**ポパー哲学を評価しようとする試みのほかに、パーヴィンは**現代哲学のなかで**の評価も試みている。彼は、方法としてのポパー哲学は現代の政治思想で支配的なアプローチの多くと簡単に摺合せができるものではないと主張する。ポパーにおいては、認識論的諸規則(方法論的規則)が同時に社会改革の規範的原則にもなっているという指摘である。この点については、評者はもっと議論があってしかるべきだと感じたことを申し添えておきたい。

パーヴィンによれば、ポパーをケンブリッジ学派の一員と見なすこともできない。というのは、ポパーは、テキストの意味を歴史の文脈のなかで再構成することのみならず、そうした言明の真偽を決定することが重要だと信じたのであり、政治哲学の核心は、意味解釈ではなく、問題を見つけ解決しようとするところにある、と考えたからだとされる。

ポスト・モダニズム、ポスト構造主義、批判理論との関連では、ポパーはこうした思潮に相対主義を見ていた、と評価されている。しかし、評者の目には、パーヴィンの議論は相対主義と批判的多元論との違いを十分にくみ取っているとは思えない。というのも、たとえば彼は、ローティの相対主義(基礎づけ主義の拒否)とポパー哲学の親近性を指摘するのだが、このような評価はほんとうに妥当なのだろうか。評者に

は、これはパーヴィンが非正当化主義を理解していないための誤りと思われてならない。

他方で、パーヴィンの見解では、ポパーは哲学的プラグマティズムやロールズ派と親近性をもつとされる。パーヴィンは、ロールズ派が社会秩序を形成するための第一原則を探していることに対して、ポパー哲学は批判的に機能すると考えている。しかし、目的論的道德の拒否という点で、ポパー哲学は多くのアングロ・アメリカンの政治哲学者を含めてロールズ派と一致すると主張されている。また、ポパー哲学は規範言明の有意義性を主張する点でも現代のアングロ・アメリカンの政治理論家と一致するとされる。これとは対照的にパーヴィンは、言語分析哲学は自由といった概念の普遍的定義を否定し文脈のなかに閉じ込める点で政治哲学の死をもたらしかねないというバーリンの危惧に同調し、ポパー哲学はそれらと戦ううえで役に立つと主張している。

ポスト・モダニズム、ポスト構造主義、批判理論に関しては、ポパー哲学は親和性をもたないと指摘されている。評者もそれはその通りであろうと思う。

以上、駆け足でパーヴィンの議論の大筋を見てきたが、ポパー哲学に対する彼の評価は、ポパーの思想は現代の政治理論家たちに理解されていない、ということである。ポパー哲学の多面性、彼のあらゆる思想への批判などは既成の枠組みには収まらないとされる。「ポパーは博識家であって、人と反対の見解をとる人である(contrarian)」(p. 149)というのである。

+++++

アンケート結果についての報告

小河原 誠

本誌の電子ファイル化について前号でアンケートをとりましたので、それについての簡単な報告をしておきます。回答総数は 26。表を参照してください。

ポパーの流行に対する嫌悪は、ポパーの位置づけを難しくするのであり、「彼は、現代の政治哲学においてマージナルな人物であるし、そうあり続ける」(ibidem)というのが、パーヴィンの結語である。

評者は、ポパー哲学にこのような側面があることを否定する者ではないが、そのことは同時にポパーをコンサーヴァティズムのなかに算入することも難しくすると考える。ここはそれを論じる場ではないが、たとえば、ポパーが民主主義の樹立のために暴力以外的手段がない場合には暴力を用いることも許されている点(『開かれた社会とその敵』第 19 章第 2 節)などを念頭におくと、それはラディカリズムの拒否というコンサーヴァティズムとはうまく折り合いがつかないのではないかとも思う。評者は、それはむしろポパーをラディカルな「デモクラット」の陣営に押しやるものだと考えるのだが、どうなのであろうか。

最後に本書の限界として、ポパーの認識論(科学哲学)が孕んでいる政治的(規範的)性格をパーヴィンが現代科学哲学の論争史のなかで検討していないことを、まことに残念なことながら、指摘しておかねばならないだろう。

	1. 今後は紙媒体の本誌を自分あてに発送してくれる必要はなく、ファイルのみでよい。	2. 今後とも紙媒体の本誌も送付してほしい。	3. ホームページでダウンロードできるようにするだけでよい。
はい	20	8	7
いいえ	6	17	17
どちらでもよい	0	0	1
無回答	1	2	2
総数	27	27	27

これを見ると、ファイル化への大勢は動かないようにも見えますが、今後当分の間はファイルと並行して紙媒体での発行も必要であるように思われます。

現時点で把握している問題としては、編集委員が交代した時でも滞りなく電子ファイルを作成できるかという問題があります。もちろん、PDF ファイルのみの作成であれば問題はないであろうと思われていますが、その他の種類のファイルを作成しようという時には問題が生じるかもしれません。また、電子ファイル化を進めていくと会員の出版を側面から援助する可能性も見えてきます。この具体化についてもいろいろ議

論が必要かと思われます。

現在までにお寄せいただいたご意見(とくにファイルの改変禁止措置)はたいへん貴重なものであります。そうしたご意見を踏まえながら今後の機関誌の在り方について運営委員会を中心にして検討してまいりたいと思いますので、引きつづきご意見をお寄せくださいますようお願い申し上げます。

+++++

電子ファイルの送付について

本号もまた電子ファイルを作成し送付いたします。予定では、6 月 15 日まではメールアドレスを提示されている会員に送信いたします。今回は、PDF ファイルについてパスワードを掛けておきます。ファイルを開くためのパスワードは、Popper2011 です。ファイルは、高解像度での印刷のみを許可し、他の操作は禁止されています。これを解除するためのパスワード(権限パスワード)は summer です。「アドバンス」から「セキュリティ」へと進み、「この文書からセキュリティ設定を解除」によって解除してください。(今回のセキュリティ設

定に関するご意見を kogawara79@hotmail.com までお寄せください。)

当然のことながら、メールアドレスを登録されていないとか、アドレス変更の通知をされていない方には配信できませんので、6 月上旬までに編集委員(現在は、小河原 kogawara79@hotmail.com)にご連絡いただければ、そのアドレス宛に送信いたします。また、15 日を過ぎても受信できなかった方については、当方になんらかにミスが生じていることが考えられますので、早急にその旨をお知らせいただければ幸いです。そうした方については、6 月末くらいまでには再度送信させていただきます。

(文責:小河原 誠)

批判的合理主義研究（通巻 5 号）

2011 年 6 月発行

本誌は、『ポパーレター』（1989～2008,
通巻 38 号）を改題し、継承したものです。

発行人 小河原 誠

編集・発行 日本ポパー哲学研究会事務局
機関紙編集部

〒252-0373 相模原市南区北里 1-15-1

北里大学一般教育部（小河原研究室）

Tel. 042-778-9047

Fax. 042-778-9233

Email: kogawara79@hotmail.com

入退会・名簿変更、会費徴収・会計管理に関
しては、「日本ポパー哲学研究会事務局組織・会
計部」にお願いいたします。

〒162-8473 新宿区市谷田町 1-18 中央大学
大学院国際会計研究科富塚研究室 1402 号

Tel. 03 (3513) 0415

Fax. 03-3513-0319

Email: h00370@tamacc.chuo-u.ac.jp